

に湧き上つて来る、止まる事も出来ぬ。歸つて了れば地獄へ飛んだのも同様である。生き乍ら生涯を暗く送らねばならぬ。思ひは思ひを生み、考へは考へを呼んで、早く早く、二人に何かの決心を促すやうである。

「糸ちゃん！ むらつしやいよ。」

「其處へ行けるの？」

「え、行けてよ！」

「早くゐらつしやいよ。」

出し抜けに、二人の後ろに呼び合ふ少女の聲がして、ひよろひよると、二人の可愛らしい子が現はれた。

「おや。」

と、二人の動かぬ影を見出すと、慌て、逃げ出して了つた。

敦と久子も嘗ては、手を連いであんな、無邪氣に遊び廻つたこともあつたと思ひ

出せば、何も彼も涙の種である。

「久さん！ 僕は、今言ふ通りで、家へ歸れば一生、愛のない結婚をして、魂を失つて生活さなければならぬですから僕は、歸らぬ積りです。」

敦は垂首れてゐる、久子は泣き腫した眸を上げて、

「でも、お母あ様が、それでは嘸心配になりませうから、何卒、妾はもう世の中にもないものだとお思召しなすつて御歸り下さい。」

「いや、僕は、久さんを棄て、世の中に何の望みもなければ樂しみもありませんあ、死んだ方が増しだ……」

思はずはらくと落る露の玉は、久子の頬に零れる。

「それでは、妾が、伯母様に申し譯が御座いませんから。」

「それぢや、久さん、貴女は如何する積りなんです。」

「え？ 妾？」

と、云つた久子の視線は、ばつたり敦と出會つて。

「敦さん！」

と、又、ほろ／＼泣き崩れる。

「僕は如何しても、久さんと別れる事は出来ない、死んでも出来ない。ことに久さんは只の體ぢやないのだから、如何して僕が知らん顔をしてゐられるか生れる子は一生、父の顔を知らずに終らなければならん、……僕はそんなことは爲すに忍びぬよ。」

堰き来る涙の後には又涙である、世に枯るゝ泉はあつても、自分の涙は盡くる期を知らぬであらう。

腕を組んでゐる敦は、やがて、涙を拂つて、久子の肩に手を置くと、

「久さん！」

「えッ？」

「僕と死んでくれないか？」

と、ばかり立ち上ろうとして又ばつたり、腰を下ろす。

「敦さん！ 死にませう。どうせ貴郎とお分れ申して、永らへる積りではなかつたのでございます。」

「ム。それぢや、久さん！ 貴女はもう覺悟をして居つたのか？」

「はい。」

と、云ふ聲は、多方敦には聞えなかつたであらう、一度離れた二人は又、轟と抱き合つた。こう決心をした上は、もう二人が、泣くも、嘆くのも後少かである。數刻の後には、水の底に、盡きぬ恨みを綿々と語り合ふ外に何ももう望みはない、二人は遂に覺悟したものと見えて、つと立ち上ると、もう何の猶豫もなく、涙に潤んだ手で、久子は、くる／＼と、腹に巻いた細帯を解くと、黙つて執り合つた敦の腕と

自分の腕とを一つに、ぎり／＼と巻いて、確乎と波に揉まれて解けぬやうに結んで暫く茫然として、四邊を見廻して、さて、巖の鼻へ、歩いて行く足はもう地についでゐなかつた。

限りを知らぬ大濤の面は、藤墨の色を湛えて、浩蕩として眼のつく限り巖の下に横つてゐる。

沈みに沈んだ心、我も忘れ人も忘れ、思ふでもない思はんでもない、何の求むる者もなく、壓へ来る悲痛の情に、戀人はゆるさぬ戀を、何處の世に語らうとするか浮世を通して波の底に添はうと誓つた二人の袖が、潮風にひらく／＼と紅に白に、……。沖の小島は寂かである。

一年前に眺めた濱は、朧ろに霞んで、右に連る磯浦は色を失つて、目に映つる物悉く、憂き草の姿に似てゐる。

何も、もう見たくはない。巖の下には、稚兒ヶ淵の水が、静かに二人の來るのを

待つてゐる。静かに心を落ちつけて上から覗き込むと、眩暈がする。憂き思ひに堪え兼ねる人でなくとも、そゝろに、足を水へ落さずならぬ心地になるのである。其心ゆくばかりの青海原は二人の墓である。けれども、それは、冷たい無意味な墳墓ではない。

不幸の旅人が、既に、自ら自分の希望、自分の戀、自分の若い生命を永遠へに葬つて、其處に永劫の戀の密語を得やうとしてゐるのであつた。

脚下の浪は恐ろしい勢で押し寄せながら、二人を誘ひに來た。

「敦さん！ 此深い淵は僕と貴女の墓です、又、慰處です。」

敦は、一步進み寄つた、久子の亂れた黒髪が、はらく／＼と、敦の横顔へ懸る。

「僕に何も云ふことはありませんか？」

敦は泣き出した。浪の進沫は、さ——と散る。

「二人の戀は、果敢ないものであつた。此期に及んで僕は何も思ふ事はない。誰を

恨むことはないが。只………久さんが可哀さうだ。許るしてくれ。」

久子も誘はれてはろく泣き出した。

「清ちゃん！ 清ちゃん！ お前を可愛がつてゐた姉さんは今此處で死んでも、靈は屹度、御前の側についてゐますよ。」

と、東の方を、ふと振り向いてこう呟くと、

敦様の伯母さんも何卒堪忍して下さい。乳母、さようなら、さ。敦さん。」

と、敦の顔を覗く、涙が無性に零れて、巖の上に落ちる。

「久さん。僕に確乎掴つてゐて………」

「敦さん、濟みません！」

巖を蹴立てた久子の袖が、敦の背に翻つて、紅い紅絹の色が、鮮やかにも優しく見えた。白い頬に、ふらくと五六本の髪が振りかゝるのを刹那に、抱き合つた體は波間をさして躍り上ると思ふ間に、敦の帯は、突如として、後ろから、むづとばかり捕まつた。よろ／＼と巖の絶端からのめり落ちさうになるのを、力を入れて、再び飛び込まふとする。

「何を爲る！」

危うく落ちかゝつた二人は、横様に、巖の上に堂と倒れて了つた。

「誰です！ 放して下さい！」

「馬鹿！」

後ろから引止めた男は、いきなり敦の横髪を、發矢と毆つた。

「何をするんです？ 人の………邪魔をして………」

と、結んだ二人の腕に妨げられて、急に立ち上りも得ず、轉がつたまゝ顔を隠してゐる。

「おい！ 止せ。飛び込んだら命がないぞ、はつはつは。」

と、解き兼ねてゐると思つたが細引を、勝手に解き始め乍ら、二人を、二尺ばかり

轉がして来る。

敦と久子は、穴でもあれば入り度い心地、見すく死に損つて、恥を他人に晒すと思へば、救つて呉れた人が、却つて恨めしくなる。二人は只垂頭れてゐる。

「おい、君。危ない狂言だつたぞ。俺は、丁度送別會で其邊の旅館に飲んで居つたが、君達が、迂路くしてゐたので、こりや、てつきり心中だと大いに驚いてやつて来たが……あゝ、危ない處ぢやつたな。」

と、男は、敦の顔を覗くやうにして、酒の氣を虹のやうに吐いてゐたが、

「おやく。君は藤川ぢやないか。」

と、眼を圓くするのに敦は、打ち驚いた。久子は、胸を衝かれたやうに、ぎくりとする。

「おい藤川！一體、こりや如何した譯かッ？」

「栗原君！何とも面目がなく話も出来ない。」

男は栗原弘助であつた。法科大學の卒業生送別會を鎌倉に催して、彼よりは一年上級の卒業生を送つた途に、飲み始めて、五六人連れ合ひ乍ら、來るとはなしにぶら／＼江の島まで出て来て、江の島の旅館に夜を明す積りであつたのだ。それが端なくも、自殺せんとした二人の、命を取り止めた事になつて了つたのである。

栗原は、暫く意外とも何とも形容の出來ぬ感に打たれてゐたが、ふと久子の垂首れてゐる姿に目を止める。

「この女は……藝妓か？」

「そんな者ぢやない。」

「ム。そうか。はゝあ、噂に聞いて居つた……」

と、無遠慮にも、久子の顔を覗き込むでゐたが。

「怪しからん！」

「何が、怪しからん？」

「この婦人は、何時ぞや俺が救つた人ぢやないか。」

「救つたとは、何を？」

敦は未だ、栗原の胸を解し兼ねてゐる。此時久子は、妙な話に、ふと顔を上げたが、

「あれ、貴郎は。」

と、驚くのを、

「はつは。君ぢやつたか。」

と、栗原は、笑ひ出した。

「おい！ 栗原君！ き君は、久子さんを知つてゐるのかい。」

「ム、よく知つとる。上野公園で此婦人が誘拐されやうとしてゐるのを俺が通り掛つたので救つてやつたことがある。だが、君の女ぢやつたか、世の中は妙な具合になつて行くわはつは。」

敦は感謝する。久子は夢見る心地で、悲しくもあり又嬉しくもある。救はれたのは嬉しいのかも知れぬ、然し、生きて居れば、又、覺悟せぬ前の浮世に戻らねばならぬ。それが死ぬよりも辛いのである。

「栗原君！ 君が救つて呉れたのは有難いが、僕は生きてゐられない事情があるのだから、ね。此儘君には申し譯はないが、引き退つて呉れ玉へ。」

「馬鹿を云へ。折角かうして命を拾つたんだ。……あゝ、酒の酔ひも醒めて了つた……、再び、死ぬと云ふのは、そりや、生きて居られんからの事だらうが、まあ、成る可くなら死なずに生きてゐる方がいゝぞ。」

栗原の口には刺があらうとも腹には蜜が籠つてゐる。

「君は、此婦人と添はれんから死なうと云ふのだらう。」

栗原の眼は光つた。敦は點頭く。そして、

「實は、それもあるし、久子も僕とは夫婦になる譯に行かんだ、僕は餘儀ない事

情の下に或女と結婚を強られてゐる。』

「ム。大概其邊の處だらうと思つては居つたが、其或女と云ふのは誰ぢや。」

栗原の性質は、何處までも、事情を糺さなければならぬらしい。

「秋田中將の娘だ。」

「ム？ 秀遠さんの？ すると秀雄には異腹の妹になる！？」

「そうだ。」

栗原は、始めて知つた。久子も知らぬでもなかつた。

「よし。安心せろ。」

栗原は何の考ゆる處もなく、言ひ放つ。

「俺は、君に、昔から許嫁のやうな女があるとは、聞いて居つたが、此婦人とは知らないで居た。成る程、事情を詳かにすれば、二人共、俺は可憐そうに思ふ。ま、安心せろ。」

と、敦に云ひ棄てると、今度は垂頭れてゐる、久子の背を軽く叩いて、

「久子さん！ 貴女も安心しなさい。ム？」

と、妹でも慰むるやうである。

「そんな事は、俺が知つた以上は心配するな。立派に君等を夫婦にして見せる。」と、立つてゐたが又蹲裾で、敦の肩に手を置く。

「どうだ。俺に任せる事を承知するか、藤川？」

敦は考へてゐた。よし此男の力で、自分と久子とが生きて生涯を共にすることが出来るとしても、その爲に心安からず感ずる人が多いであらう。嗚呼自分は生じい助からずに居ればよかつたと思ふが、又、考へて見ると、否々、死ねばこそ悲しむ人もあらう、俺は何故、死なうとまで思ひ詰めたのであらう。久子も、久子の腹にある二人の子も助かる譯だ。自分は、假令、もう、久子と何の妨げもなく結婚が出来ぬとすれば、せぬでもいゝ、一人犠牲になる。久子は助けねばならぬ。それ

で、満足に久子と添ふことが出来るならば、幸は此上もあるまい。栗原は荒くれ男である。然し、涙もあれば血もある、頼りにもなる男である。親切に云つて呉れるのを無駄には出来やう筈がない。かうなれば、命を救つて呉れた彼に二人の成り行を頼むより外に方法は無い。出来ることならば、どうでもして、久子と自分とを考へた敦は、

「栗原君！ 君に萬事を頼む。僕の味方は只君一人あるばかりだ。」

と、云つて、弘助の手を執つた。

「久さん。落膽せずにあてくれ。」

敦と久子は顔を見合せて、ほつと吐息した。

「おい。此處へ居ても詰らんから、兎も角も、俺の旅宿へ行かうぢやないか。」

三人は立つた。久子は、定り悪相に。腕を結び合せた細紐を、帯の下へ巻いて結ぶと、はたくと土を拂つて、歩るき出す。

「あゝ、お蔭ですつかり酔が醒めたぞ、はつは。」

三人は離れ離れになつて島の細道を辿る心細い姿が、午後の陽に、斜めに淡く影を投げて、脚下の波は、金色の鱗を動かしてゐた。

## 二 一 一 世

「江戸家」の格子戸を開けて、

「ごめんなさい。」

と、這入つて来る人聲に、長火鉢の側に、ごろりと横になつて新聞に目を奪はれてゐた秀雄は、一寸四邊りを見廻し乍ら、ちよつと舌打する。

「誰も居ないのかしら。」

と、呟き呟き、のつそりと、首を伸べて置時計を見ると、

「もう晝だな、仕様ないもう歸りそうなもんだ。」



と、獨り言を零し乍ら、上り口の障子を、勢よく開けて、這入つて来た人を見ると急に眉を潜める。

「戸部さんですか。」

と、言つた儘、お上りなさいとも言はず黙つて突つ立つてゐる。戸部は暫くもぢもぢしてゐたが。突然庭に突つ立つた儘、

「今日はもう、疾ふに期限が切れてゐるんですから、何とか形を付けて貰ひに上りました。」

と、切り口上になる。

「それや、解つてゐるが、何分親爺と僕との間がね、君も知つてゐる通り、未だ圓満に歸らぬから、今暫く待つて呉れ玉へ、今日は出来ないのだから。」

と、猶依然として立ちすくんだ儘なのに、物の五六度も此處へ掛け合ひに来て、一度も碌な返事を聞かなかつた戸部は到々憤り出して了つた。

「出来ないと仰有るんですか。」

「出来ない。」

「貴郎は出来ないで済むだらうが、私の方は家稼ですからね、今日は如何な事があつても只では歸らぬ覺悟で伺つてゐるんです。」

と、秀雄の顔を見詰める。

「其様な無茶苦茶な事を言つたつて出来ない物は仕方があるまい。」

と、秀雄の言葉も荒々しくなつて来る。

「貴郎は私に拂ふだけの餘裕がないのか。」

と、戸部は、くわつとなつて、眼を光らす。

「馬鹿を云つちや、困るぢやないか、貴様に拂ふ位の餘裕が有るなら何も貴様から借りはせん。早晚何とかするのは解つてゐるんだから、今日は歸つて呉れ玉へ。」

と、秀雄は云ひ捨て、ひよいと引込まふとする裾を引つ掴んで、

「駄目だ、それは不可。私は貴郎に欺かれて態々電車賃を使つて来たんぢやない。」

「ぢや、如何しやうと云ふんだ。」

と、秀雄は睨み下ろす、

「私と一緒に秋田さんの邸迄来て貰ひ度い。」

「何！ 親爺の家へ同道せろと云ふのか？」

「そうです！ さあ行きませう。」

と、疊の上から秀雄を引下ろさうとして腕を伸べるのを、

「ちよつと待て！」

と、秀雄は拂ひ除けやうとするはずみに、よろ／＼と足に力を失つて、庭へ轉げるやうにして飛び下りる、其刹那格子が外から、がらく／＼と開いて、

「何をしてゐるんです見苦しいぢやありませんか。」

と、君江は秀雄を呆れた様に見てゐたが、振り返つて、

「何ですわねえ。他人の家へ這入つて、何時も騒々しい！」

と、白い眼で、ぢろりと睨むやうに見る、戸部は不意に外から歸つて来た君江の姿に、呆氣に取られてゐたが、

「貴郎が嫌だと言へば私が一人行く丈の事でさあ。ね、都合が悪からうと此方で考へてやればこそ、同道しやうと云ふぢやないか。」

と、飽く迄も執着する。秀雄は忌々し相に、

「俺も男だ、行くから一寸待て。」

と、君江と戸部を残して置いて、ふいと、茶の間へ飛び込むと、無造作に羽織を引つ掛けて、

「さあ。行かう、君江、一寸小石川迄行つて来る。」

と、云ひ棄て、今度は、勢よく家の外へ出ると狼狽へて、秀雄に逃げられまいと用心する戸部は、秀雄とは一尺も離れずに後から跟いて行く、

二人が、かうした張り詰めた心持を抱き乍ら小石川原町の秋田邸の門前へ近づく迄は、てく／＼歩るいて居ても、双方共無言であつた。戸部は、始終秀雄の舉動に眼を附けて逃げられはすまいかと、氣にしてゐるのだつた、

秀雄は道々も色々考へた。此儘「江戸家」の門を威勢よく出て来る事は出て来たものゝ、さて、父の眼、父の顔を胸に描くと、どうしても、高利貸の戸部を連れて秋田の家を跨ぐ勇氣はない。秀遠が、今の自分の境遇、身持ちを知つたら！……否、知つてゐるに違ふはなからうが、眼のあたりに、良からぬ男を連れて、歸るのを見たら、何と云ふであらう。怒りの餘りに、父の氣性として、恐ろしい目に逢はぬとも限らぬ、と云つて戸部を途中で捲いて了つて逃げる譯にも行かぬ。秀雄の心は千々に碎けてゐたが、やがて、男爵秋田秀遠と大きな表札を打つた、木造りの門の前まで来る内に、ふと考へついた事がある。それは、此處で、戸部を出し抜いて姿を眩ますことである、如何に父の耳、父の眼が鋭く敏くあらうとも、

門と家とは十二三間の距離がある。少し位は、此處で愚々言ひ合ふ位なら、よもや家の人々の耳に這入ることはあるまい、よし。戸部も尋常一様の人間でない限り、彼に對して、逃げるものかと言ひ放つた言葉の裏を搔く位の不徳義は何でもないのだ。

自分は逃げなければならぬ。假令戸部が一人で父に掛け合ひに行く勇氣があるとしても、自分は、此儘父に顔が逢はせるものぢやない、第一、危険だ、  
こう考へて見ると、秀雄は如何しても逃げ延びなければ承知出来ない氣になるのである。

『此處だ。此處が僕の家だから、兎も角も、君は此處で待つて居て呉れ玉へ』  
と、出し抜けに、戸部を門の外に立たせて置いて、家の方へ駈け出さうとする。  
『それは、いかんです。表から這入つて裏から抜け出すといふ事は、よくある事だから、私も其手は度々喰はされて來たんだから、駄目です！』

と、云ふのに、今更乍ら、秀雄は慄然として、自分の腹を見透された様な気がするが、強いて平氣を粧はねばならぬ今の場合である。秀雄は笑ひ乍ら、

「馬鹿を云ふなよ。吾輩は其様な性質の悪い男ぢやないから安心し玉へ。まあ鳥渡這入つて親爺の様子を見て來るんだから此處に待つて居て呉れといふに、恐ろしく解らん人間だね。」

と煙に捲かうとするが戸部は頑として頭を横に振る。

「駄目です。駄目です。私も一緒に行く。」

と、堅く主張して秀雄の思ふ様に行きさうにもない。

「困るね、駄々を捏ねられちやあ。」

と、秀雄は途方に暮れてゐるが、心の中では、旨く行きそうにない淺慕な目論見を立たずに、何故自分は、もつと利巧な路を取らなかつたかを悔ゆる、然しそれは、相手が、猿か蛇のやうな戸部であることに氣がつくと、仲々左様は、突差の間に、

安全な、目の醒むる程の感心な逃げ方が考へ浮ぶものぢやないと、思ひ直して、

「如何しても一緒に這入ると云ふのかね。」

と、外に言ひ様もない。

「無論です、其爲、故意々々……」

と、云ふのを打ち消すやうに、

「叱ッ！」

と、制し乍ら低い聲になる、

「戸部君！一寸静かに……今門の内に足音がした。」

と、門の扉に身を摺り寄せて、二三步、静かに歩るき出して門の内の動靜に耳を澄しては、又二三步歩るき出すのを、後ろから眺めてゐた戸部は、逃げられてはと思つたらしい、いきなり、門の中へ駆け込んで、萩の植込みを蝸牛の這ふやうに、ずる／＼身を動かして行く秀雄の袂をぐつと掴んで、

「秋田さん！ 如何するんです？」

と、嚴然になる。

「何をするんだ君！ 袂を離し玉へ、逃げるんぢやないと言つてるぢやないか。君！ 這入つて来ては不可ない。」

と、袂を拂はうとするが、

「馬鹿にしちや困る。何といつたつて動くもんか。」

と、益々大聲になるのを、秀雄はもう黙つて聞いてゐられなくなつて、突如として戸部の肩に打ち下す鐵拳の唸りが、戸部の體に觸れぬ間に、

「あッ！ お父さん！」

と、秀雄は、横合から、ひよつこり姿を現はした秀遠の老體を見ると、其儘逃さうとするが、袂は確乎と戸部の手に握られてゐる、

「コラッ！ 何ぢやお前達は、他人の家へ駈け込んで来て。」

秀遠は、秀雄を睨みつけると、秀雄は、すくみ上る。

呆氣に取られてゐる戸部は、秀遠をじろくくと見詰めてゐたが、

「貴郎が、此方様の御主人ですか。」

「そうぢや。俺は今出掛けやうと、思ふ處ぢやが、一體如何したと云ふのか。」

秀遠は五つ紋の羽織に袴を穿いてゐる。外出しやうとしてゐるのを見抜いた戸部は、

「如何も飛んだ失禮して濟みません。實は、私は此秀雄さんに金を借したのですが

期限が夙に過ぎてゐるに拘はらず、少しも返濟をして下さるのですから、今日は

此處へ同道して貴殿へ御願ひしやうと思つて……はい……」

と、頻りに腰をかゝめて秀遠の様子を窺う、

「ム。」

と、秀遠は黙として、秀雄の縮こまつてゐる姿を、つくづく見守つてゐる。老將軍

の眼に涙が浮び出てゐる。

「貴様は、何處の者ぢや。俺の悴は、矢つ張り貴様のやうな奴ぢやからな、今頃、歸つて来る筈はない、又、お前さんの方も、貸した金が取れなくては困るぢやらう。俺は、此男と何の縁もないものぢやがの。此處に此丈の金があるから、持つて歸つたら良らう。」

と、懷に藏つて置いた古い折り靴の中から、一束の紙幣を抜き取ると、ぼんと戸部の前へ放り投げて、外へ其儘出て行くかと思れば、

「おい！ 其處に居る男。お前には一寸尋ねることがあるから、邸までやつて来い。」

と、すたく庭園を迂廻して椽側へ出ると、後ろから、とぼりく跟いて来る秀雄に、

「此處へ掛ける。」

と、言ひ棄て、自分も其處へ腰を下ろすと、

「秀雄！ 貴様は何故、此俺の顔に迄拘るやうな放埒をするのぢや！」

老將軍の雪の如き顎髯は、上下に動いて、破鐘のやうな聲が、秀雄の頭に噛みつくやうに響く、秀雄は唇の色を變へて、垂頭目になる。

「少しは、人間の道と云ふ事を考へろ。立派な人間になる可き筈の人間が、他人から金を借りて、その後始末の尻を、親の處へ持つて来るとは何の事ぢや。貴様の放蕩無残な行は、新聞で見ても、ちやんと承知してゐるがの、貴様の爲に、俺は如何程人の前に肩を狭くしてゐるか解るまい。貴様は、此秋田家の柱石となる可き體ぢやないか。俺は貴様を既に家の者でないと諦めてゐる位ぢやから、何も言ひ度はない。貴様に意見をしてみた處で、それは……畢竟何の甲斐もないのぢやから、貴様が學校を追放されて以來と云ふものは、此父は如何程、貴様の身を思つて心を痛めたか知れんぞ、ちと親の心にもなつて見るがいぞ。俺はお前の爲に、此上世間に恥

を晒したくないぢや。俺が、今此處へ貴様を呼んだのは意見をするためぢやない、貴様は、家の者とは思ふとらんのぢやから。」

と、將軍は、暖き敢へぬ老いの涙に咽び始めた。

「解つたか？」

「はい。」

「解らなければならん筈ぢや。」

「お父さん。僕が悪ふ御座いました、以來は、心を改めて、必ず成功します。どうか、今日迄の罪を御赦し下さい。僕は屹度、眞人間になつて歸つて來ます。」

と、秀雄は流石に暗い心地がするのである。

「そんな事は聞かんでもいい。今貴様を呼んだのは、さあ。これを貴様にやる爲ぢや！」

と、秀遠は、縁側から書齋の机に手を延べて一挺の短銃を引つ摺むと、秀雄の膝下

へ、どさりと投げ遣る。

秀雄は、ぎくりして思はず父の皺顔を見詰める。松の立木を透して射込む、夕陽が、黒色の短銃の、銃口を照らして、今にも、其處から轟然と響を發して白煙が立ち騰るらしく生々とした鐵の色が、眼に悪色を見、耳に悪聲を聴く秀雄には、一つの魔の閃きを含んで見える。秀遠は、眼を瞬たかせ乍ら、

「秀雄！ 此短銃は、貴様に今遣るのぢや、人を殺す爲めではないぞ。貴様が果して善良な人間に戻る事が出來たら、此を持つて歸つて來い。俺は死んで持つてゐる。然し、それに反するやうであつたら、男らしく此で自殺せい。解つたか。」

痛切な秀遠の言葉に秀雄は胸を刺されるやうに覺えた。

「はい。解りました。」

「ム、解つたらさつさと出て行け。」

「ではお父さん、僕は必ず眞人間になつて成功して歸つて來ます、待つて居て下さ

い。』

と、秀雄はそつと短銃に手を觸れる。ひやりと冷たい感覚が、全身の血汐を凍らせる。

『そんな事は約束せんぢや。』

秀遠は、やをら身を挺して椽側に下駄を脱ぎ捨てると、其儘書齋へ這入つて了ふ。

『お父さん、僕は失敬します。』

と、云つて庭へ下りた秀雄の言葉には返事がなく、夕闇迫るのを知つて、そろそろ草の葉に鳴き出す秋の虫に送らるやうに、秀雄は、萩の蜿蜒の歩るき馴れた小路を辿つて行く行く。握り締めてゐる、小さな銃を見詰めてゐると、突抜けに、

『おや、若様ぢやございませんの？』

と、後ろに聲がする。

『あッ！ 藤川の伯母さんでしたか。』

と、慌て、振り向かぬ間に、秀雄は素早く、短かい魔物を袖に隠す。

『久瀾でございましたわねえ。』

と、お民は愛相をする。そして、見ぬ振りで、じろくくと秀雄の變り果てた頭の先から足の爪先まで見下ろす。秀雄は定り悪る相である。片方の袂が、鐵の重さに格好悪く、ぶらりとしてゐるのを氣味悪く握つてゐる。

『伯母さんは遊びにゐらつしやつたんですか。』

『はい。一寸。』

と、云つてお民は、

『御前様から承りましたが、若様は此頃少しも御歸りに成りませんそうでございますね。』

と、暗に秀雄が酒と女に魂を抜かせてゐることを嘲るやうに云ふ、と秀雄は、笑ひ



乍ら黙つてゐる。

「如何遊ばしたんですの？ 宅の敦も、眞個に心配して居るのでございますよ。」

「ふゝ。」

秀雄は少しして来て来る。と同時に又、規帳面に仕事に全力を注いでゐる、自分の周囲の人々が、羨ましくもなり、癢にも障る。俺は、俺の周囲の凡ての人よりも、未來に望を囑されてゐた俊才であつた。今だつて、如何かして持ち返されぬことはない。然し、仕事が何だ、名譽が何だ、金が何だ、門閥が何だ、そんな着物や飾り物は、一切俺には不必要である。俺は、生きた人間として生活するのだ、窮屈な舊い型に穿つた生活は、蛇よりも嫌だ、ふゝんと周囲の人々を嘲けつてやり度い。と、思ふと、朦朧として眼先に、只つた今、涙を零してゐた老人の顔が現はれて來るとハツとする。

「何處へ只今お出になるんでございます。お住居は？」

と、意味有りさうな口裏である。

「へゝ。浮浪人ですよ。伯母さん。」

「ほゝゝ。でも、お宿りなさる處は、ちやんと定つておられます。」

「言ひますまい。はつは。」

秀雄は無理に苦笑する。と、どうしても片方の袂が重くつて心持が悪い。早く歸りたいと思ふと、足がむづ／＼して、詰らないお民に掛り合つてゐるのが、腹立たしくさいなつて來る。足元では虫が鳴いて居る。

「僕失敬します！」

と、頭に手をやるが「江戸家」を慌て、飛び出す時、忘れて帽子を冠つて來てゐなかつたのに、始めて氣がつくと、急に、自分の姿が、だらしなく、身すぼらしく思はれて、駆け出さうとするのを、お民は狼狽へて、

「あれ！ 若様、一寸お待ち遊ばせ。」

と、追ひ継るやうにして、

『あの、是非お所を伺へませんでせうか。』

と、手早く帯の間へ手を入ると、豫め、用意してゐたものか、それとも、好い具合にそうしてあつたものか、お民は、小さく折つた紙片をそつと、秀雄の手に握らせる。秀雄は其瞬間、此が、紙幣だと悟つた。

『伯母さん、此を如何なさるんです。』

と、氣疑な眼をしてお民を見詰めた儘、紙幣を掌平に乗せて、突き戻すとも、納めるとも、し兼ねてゐる。

『あの、失禮でございますが、お不自由でございますませうから、少しばかりでございますけども、若様のお小遣に遊ばせ。』

と、氣の毒さうな顔をして、茫然としてゐる秀雄の手を急に袂へ入れさせやうとする拍子に、お民の手は、短銃に、すつと觸れたらしく、秀雄は、愕然とする。

『左様ですかね、お氣の毒ですなえ、ちや、丁度僕は困つてゐる處だから貰つときますよ。』

と、蒼褪めた顔に、笑を浮べて、眼を輝かす。

『何卒。』

と、お民は、秀雄の耳端に口を當て、小聲に、

『若様の、お住居は、何處でございますの？ 妾、ひよつとしたら御伺ひ申しますかも知れませんが、是非知つて置きたいのでございますよ。』

と、私語く、秀雄は一寸、躊躇つたが、

『矢張り以前の所です。』

『おや、左様でございますの？』

と、吐息する。

秀雄は、お民と別れる時、一寸家の内を覗いて見たが、誰も居ないらしいので、

黙つて、門を出ると、すん／＼池の端の方を向つて、根津権現の、社を裏通りへ出る。

歩く度に、ぶらり、ぶらりと、袂の中の短銃が揺れて困つた。

自分の生活は、今日から如何なり行く事か、秀雄は、自ら、それさへ解らない。秀雄の心は刻々と化つて行くやうに思はれる。

ふと、俺の袂には、ピストルが這入つてゐるのだなと氣がつくと、直ちに、俺は何の爲にピストルなどを、持つて来たんだらうと考へて、老人の前に立派な誓ひをした、秀雄といふ男は果して、此處を今歩いてゐる自分だつたかしらと、疑へる程、氣が揺れ動く、

秀雄は、頭の中を、半日の間に出来て了つた、事が、走馬燈のやうに、活動寫眞の様に、どん／＼過ぎて行く。足はふら／＼する。俺は如何なるのだらう。自殺せろと言つた父に、俺は何と云つて別れたかしら、半ば夢のやうに、半ば現のやうに

して一心に唯眼先に突きつけられた短銃を見つめてゐた自分の身すばらしい姿が、思ひ出される。

俺は如何して情落者の眞似をしてゐるやうに成つたんだらう。久子を誘拐するに至つたのであらう。高利貸の戸部に怒鳴られる體になつたんだらう。

秀雄は、根津権現の境内で、危くピストルを捨てかけたが、それは止めた。俺は人間の道を踏み外してゐるかも知れん、が。それは行き直さうと思へば、行き直せる。出発点から今度は人間の道を行き直すとしたら、と考へてゐると。茫然君江の顔が現はれて来る。

### 二三 はらから

一月経つても二月経つても敦は房枝との縁談について、お民に何とも確乎とした返事をしなかつた。お民は、氣乗のせぬ敦と秋田の父との間に立つて、板挟みの形

で一人で氣を揉んでゐる。一週に一度は缺さぬやうに秋田の方から返事を迫られる。否返事を迫られると云ふよりも、婚禮の儀式を急がれてゐるのである。敦の身を早く固めて置いて、肩の重荷を下ろさうとするのである。

始めから、不服を稱へた敦を、此處まで引つ張つて來た上は、もう其處に何の障害が轉げ出さうと、お民は動かない落着と決心とを持つて、名譽ある婚儀を取り纏めてゐるのである。それが敦に取つて至極迷惑であらうが。藤川の家を取つて再び獲へ難い最良の縁であると考えてゐるお民は、自分の苦しい心を汲みとつて呉れないで、もじくして旗色の悪い敦を恨めしく思つた。

それにしても彼女は、秋田の使が、引つ切りなしに飛んで來る事を考へ出すと、もう昵乎としてはゐられないで、今しがた外から俣で歸つて來た體をそのまゝ、敦の部屋へ運んだ。敦が向つて組腕を机の上に置いた前の玻璃窓の外を、寒い冬の風が兵々と吹き捲つて行く、敦が知らぬ間にお民は、後ろに重ねてある座蒲團を一枚

引き摺んで、敷くと、べつたり座り込んで、特更に愁はしげな面を伏せるやうに垂頭で、今にも敦が振り向くのを待つてゐる。

敦も何か考へ込んでゐるらしく容易にお民が、自分の尻へ坐つてゐることを知り乍ら、振り返らうとはせずにと、お民は、

「敦や。敦や。」

と、倒々聲をかける。

「一寸、此方をお向きよ。お前勉強してゐる様子ぢやないから、お邪魔にはなりません。すまい。」

敦は組んだ腕を解いて、淨かぬ色である。

「お母さん、何です。僕少し考へてゐる事があるんですから、話なら後で出來ませんか。」

「妻が何か云へば何時もお前それだね。」

『そうでは、ないのですが……』  
敦は困り切る。

『お前お母さんの言ふ事を聞き度くないから、彼方へ行けと仰有るんですか。』

『いゝえ、そんな事を言つた記憶はないです。』

『そんなら、いゝぢやないかえ、何も手前の取れる六ヶ敷い話を聞いてお呉と頼むのぢやないからな。でも否なら仕様がないから。妾行きませう。』

『そんなに怒らなくても。』

と、敦は、立ち掛けたお民を撫める。お民は餘り強過ぎたと思つて急に顔の色を温らげる。

『お前、大分着物が汚れたやうだね、ちつとは着更へたらいゝぢやありませんか。』  
と、お民は急に微笑した。

敦は黙つてゐる。お民は話の緒を外らせて了つたと、思ふと餘計な事を饒舌つた

のが口惜しかつた。

『實は、ね、敦。今日は妾はお前の確かな返事を聞きに来たのだよ。ね、お母さんや、家のことを思つて、お母さんが安心するやうな返事をしてお呉れな。』

と、やつと、如何云ふ彼様云はうと胸の中に拵へてゐた事の端を口に出した。

『お母さん。貴女は、餘り残酷ですよ。結婚は、幾ら、他から、わいゝ騒いでも、本人が進まねば、結局は、悲惨な終りを告げねばならんことになります。』

敦の眉には憂鬱な蔭が宿つてゐる。

『そいでは、矢つ張り、お前が駄太を捏ねて、此處まで話を進めて來た妾を、お苦しめかえ。』

『苦しめるとは思ひませんよ。』

『いゝえ、妾は、お前の煮え切らぬので、如何位苦しい思いをしてゐるか解りませんよ。お前は何と云ふ親不孝な子だらう。妾が、こんなに瘦せてゐるを少しも可哀

相だとは思つて呉れないのだから。」

半分は怒り聲、半分は泣き聲、

「ね。可哀相だと思ふなら、もうあの久子も思ひ切つたと立派に言つたお前だから妾の云ふ事も聞いて呉れて、房枝様と立派に婚禮をしてくれたら、いゝぢやありませんか。」

敦が黙つて苦い顔をしてゐるのを見るとお民は、

「ぢや、お前、妾に嘘をお吐きだ。」

と、烈しい調子に變る。

「久子を思ひ切つて了つたと一時通れの嘘を吐いたのだね。」

「お母さん。僕は一度口から外へ出したことは二度口の中へ入れることはしないです。久子は諦めてゐます。」

「それなら、何故、妾の云ふ通り親が許るし合つた娘を貰はないで、お母さんに反

對突くんです。」

「久子を諦めたのは房枝を貰ふ爲ぢやないのでした。」

「えッ！ お前、今になつて、そんな卑怯なことを云ふものぢやありません、それは、親窘めです。親窘めです。親窘めです。親窘めです。」

お民の聲が疇走ると、敦は慌て、

「お母さん。見つともないから大きな聲は出さないで下さい。」

「いえ。お前は親窘めです。」

「あゝ、困つちまふ。」

敦は投げ出すやうに吐息すると、沈み込んで了つたが、

「お前、妾はもう、結納も婚禮の日取りも定めて了つて來てゐるんです。」

と、云ふお民の言葉を聞くと、もう、何も彼も考へて居た事が灰になつて、萬事が此處に休して了つたやうに、何とも言はずに深い深い嘆息を吐いて、もどかしくも

自由を失つた自身と、意地悪い運命と世間とを呪咀はすにゐられなかつた。

朝から、薄どんよりと曇つて、鉛のやうな雪模様の寒空は、午後になつて、頓に暗くなると思へば、ちら／＼と白い、大きな物が降り始めた。

一分、二分と地に降り敷く内に、次第に堆くなつて、やがて、午後の二時頃には一二寸も積む程になつたが、雪は未だ止みさうな気色もない。

小石川曙町の停留場から原町へだら／＼と下りて行くと、此邊一帯には、餘り珍らしくもないが、一つの水色に塗り立てられた洋館が、突と一つ秀いで、目につく、男爵秋田秀遠の家がそれである。

此雪を待つてと云ふ積りでもなかつたらうが、宴會らしい催しがあると見えて、引きりなしに駆けつくる馬車、人力、自動車、中には、高足駄に雪を蹴散らして、

集ふ人々が、門内に、溢れる計り、さしもの廣壯な庭園も、白い雪と、黒い禮服の人とに、黒白に染め分けられて見ゆるのである。

軍服の髭鬚い人、胸間に大きな勳何等を輝やかせて、髻すごく人。五つ紋の黒羽織に、日本の上流人は我ぞと、人混みを肩の先で分けてゐる人、其間を掻ひ潜つて主人を尋ね歩く血眼の従僕。金鎖の淑女、令夫人。實に秋田一門の男女は悉く此處に集つたかと思はるゝばかりに眼を醒むる綺羅星の動く様、道行く人の足を止まらせる、只ならぬ騒ぎの折も折、雪は音を呑んで降る。

「やあ！ 正木さん。」

と、人波の中で聲がして、大尉服の青年が一寸擧手の禮をすると、呼ばれた相手は山高帽に手を掛け乍ら、

「相憎な天氣になりましたな、時に式は何時でしたかな。」

「未だ半時間も間があります、如何です、少し向ふの築山の方で休まふぢやありませんか。」

せんか。」

大尉は、腕の金時計を眺めるとこう云つた。

「それがいゝです。私も。餘つ程左様しやうかと思つて……はつは、先刻から立ちづくめなんですからね。家の中は大分混雑しとると見えますわい。」

正木は大尉と連れ立つて、雪の中を、被り物をも持たず、急ぎ走りに、人と人との間を摺り抜けて、泉水の小橋を渡ると築山へ出る。こんもりとした、杉と松の老樹が、空も見せず、枝を擴げ合つて、參差してゐる。一面、眞白な庭園の此處だけが、少かに、土の色を保つてゐた。

二人は其處へ駆け出して、老木の梢を仰ぐと、崩れかゝりさうな雪の堆塊に、冷りと膽を冷す。正木は首を縮め乍ら。

「貴君、秀雄先生に逢ひましたか、今日？」

と、大尉の顔を見る。

「いや。閣下には一寸面會して挨拶を済しときましたかね。あの大將には逢ひませんせ。」

「はつは、逢はない筈ですよ。」

「如何したと云ふんですかね。」

「はつは、貴君、未だ御存じないと見えますね。」

と、正木は笑つて見せる。そして何か、其處に原因でもありそうな口調である。

「いや。僕は一向何も知らんですよ。何しろ、青島攻撃から閣下の御供をして歸つて來た翌日から、軍隊生活でしてね、閣下は、とんと御不沙汰してゐるのですから。」

大尉は眞面目な顔をして髭を撫でる。

「ふ。成る程、それぢや、お解りにならないのも尤もですよ。實はね。秀雄先生。先達から池の端の何とか云ふ藝妓に、大浮れに浮れてさ。私の家内も、通りかゝりに



一寸立ち寄つたことかあるんですよ。』

と。正木は得意になる。

『一寸、待つて下さい。奥さんが立ち寄つたといふのは何處です。』

と、大尉は不審がる。

『はつは。貴君も話せませんな。家内が、其、藝妓の家——要り、藝者屋ですよ。』

即ち何とか待ち合ひに、それとなく意見を考へて立ち寄つたといふんですよ。』

『ム。成る程、解つた。』

大尉は、やつと解釋ついたらしく、微笑する。

『處がですよ、先生、どうして家内なんその女雑兵が、東になつて来たつて、動き

さうにないんですとさ。はつは坊つちやんだから、ね、貴君。欺されてゐるのか、

如何か知らんが、穿り込むと、仲々の大熱ですからね。』

『フーム。』

大尉は、些細らしく耳を傾けてゐる。

『それで、何ですか、今日の大禮にも缺席仕つてお居でなんですか。』

『ま、その邊でせうね。』

正木はこう云つて、何か思ひ出すらしく。

『然しね。秀雄先生の方で、やつて来やうと思つてもさ。中將が許すまい。第一不

體裁この上なしですからね。』

『すると何ですか、秀雄さんは。』

と、云つて、聲を小さくして、

『昔で云へば、勘當を喰つてお居でござな。』

『それが、當然ですよ。何しろ、他の公衆や大名華族とは違つて、一國の安否を双

肩に擔つてゐられる中將の家から、そんな道樂息子が出たとあつては、何が何でも

世間體が悪いし。それに、此邸へは、よく、外國の高官がやつて来るんですよから、

若しもの事があつて、例の馬鹿げた處を見られやうものなら、中將の事だからね、何んなことになるか知れんと云ふので、まあ、親族の方から忠告や心配する人があつた爲、當分でせうな、秀雄先生は追放の形ですよ。はゝゝ。」

正木は言葉を切つて笑ふ。と、庭前庭後に、邸の中に入り切れず、ゑんでゐる人々が、急にどよめき始めたのを見てゐた大尉は、

「や。もう式が始まるらしいですよ。出掛けやうぢやありませんか。」  
と、正木を願ふ。

「あ！ 行きますせう。然し何ですね。今日の令嬢の御結婚には、少かに、昵懇の血族を招いたといふことですが、それでゐて、此の位の人が集つて来るんですから、中將の勢力の、今更乍ら偉大なものには驚くの外ありませんですよ。」  
と、獨り言を云ふのを大尉は横合から、

「然し。別に婿養子をするのでないのに、何故この令嬢の家で式を挙げて、世間並

に、婿さんの家でやらないのですかね。僕は、それを誰かに聞いて見やうと思つてゐた處なんですが。」

と、一寸正木を振り返る。正木は歩るき乍ら、

「そりや、別に譯はないんですよ、その婿さんといふ藤川敦さんの家が、手挟まで今云つた様な具合で、一度に、此丈の人を容れる事が出来ないから、此邸で行つて済まさうと云ふ譯なんでせう。」

と、云つて大尉が、點頭くと、

「でも、青島攻圍軍の司令官だけに、仲々以て、堅い處は馬鹿に堅い處もないではないけれども、一體が、洋式洋風ですな、はつは。今日の結婚も、其洋式で行ふ話ですよ、只、外國では、寺院でやるが、此處は、お寺まで行くのを省いたんですね。はつは。日本の寺院はちと、はつは、桑原々々、縁儀でもないですからね。」

やかで、二人は、蔭になつてゐた築山を、とばく駆け下るやうにして、雪のな

い道を拾ひ乍ら、葉蔭に没して了ふと、入れ交るやうにして、其處へ、悄然として運ぶ足も恰も地獄か斷頭臺へ赴くやうに、やがて、積る雪の今に溶けて、影薄く勢衰へて流るゝやうに、紋付袴に、生涯只一度の華燭に花婿たる可き此宵の敦の姿が夕陽も光を失つた雪雲の下に見えた。

敦は、何の用で此へ来たのであらう。何を望んで、袴の裾を崩れ落ちる雪に濡して、考へ沈み乍ら、此淋しい後庭の築山の細道を辿つて居るのであらう。

敦は一歩行いては、逡巡ひ、一歩行いては止るやうに、雪を踏んでゐる。洞房の式は既に始つてゐる。然も、その大事な、肝心な主人公の敦は、契りの席にはなくて、此人氣ない庭の片隅にゐる。

「あゝ！」

敦はふと、嘆かほしい吐息をする。と、またとぼく歩るき出した。力を失つた足は、危く體を支へてゐるばかり、心をつた空虛の體は。只、人間と云ふ影だけ

を人に見せてゐる者が、世の中に果してゐるならば。それは、此宵、此、雪の路に在む、敦のことであらう。

綿々として盡きぬ恨は、長へに消ゆるまい。糸の如く紊れ狂ふたのは昨日までの敦が心であつた。今日は、その亂れた心さへ消えて了つてない。二十五年の長い星霜を一刻も離れずに暮して來た敦の魂は、昨日を限り、恐らくは何時の世までも、骸同然の體と別れて了つたのであらう。その魂に逃げられた敦は、只、壯嚴なる可き結婚の式に、華かなるべき偕老の式に、死骸だけを運ばねばなるまい。此が浮世であるとするれば、浮世は、世のある限り、生ける限り、敦の眼には、心のない五體が、闇の盃に、見苦しい女の姿を映して見せる。無常な、慘酷な悪戯な、幽鬼としか見えぬ。

朗らかな祝詞、目出度いと云ふ謠の聲は、轟々と地響を立て、驀進して來る汽鐘車の車輪である。その席に行く敦は、冷やかな鐵路を枕に汽鐘車が通り過ぐるのを

眼を閉ぢて、待つてゐるのと少しも異らぬではないか。

何が悲しいと云つても、今の敦の心ほど悲しい淋しいやるせないものはないであらう。敦が、ふと、今頃は、生死は共にと誓つた、あの久子は、何をしてゐるであらう。恐らくは今宵の此有様を夢にも知るまい。若し、知つたら、嗚恨むであらうと思ひ巡らすと、ほろ／＼涙が出て來た。その涙の涸かぬ間に、愛らしい女の聲が敦の耳を、貫くやうに響いて。慄然として立ち止つた。

「お義兄さま！ 何故、そんな處へゐらつしやるの？」  
と、可愛らしい瞳を見張つてゐる。

「お、芳さんですか。」

と、流石に敦も、無心の少女を抱かすにはゐられないのである。

「お父様も、伯母様も、先刻からお兄様を探してお居ですよ。」  
と、敦が此處に今、立つてゐるのを不審る。

「芳さん。芳さんは、一足先にお父様の處へ行つて下さい、義兄さんは、後ですぐ行きますからね。」

と、芳江を得心させやうとする。

「でも……、お兄様、一緒に行つては悪くつて？」

と、猶も可愛らしい首を傾ける。

「芳さん。一緒に行つてもいゝんですけど、ね、兄様は、一寸、用がありますから芳さん、何卒先へ行つて下さい。兄様すぐ行きますからね。ね、芳さん。解つたでせう。」

何事も知らぬ芳江は、黙つて點頭いた。そして、詰らなうに、とぼり／＼、坐敷へ通する泉水の方へ去つた後で、敦は又、一頻り、沈んでゐると、夢の様な體は恐ろしく力強い者に、突如として、二三間突き飛ばされるやうに、感ずると思ふ間に、敦の胸倉は、むんずと捕まつて居た。敦は打ち倒れるやうに驚いて其男の顔を

見る。

「おい！ 藤川！……貴様はよくも俺を賣つたな！」

はつたと睨みつけた男は、栗原弘助であつた。何處から聞き込んで、何處から這入り込んで、そして、如何して此處に、しよんぼりとしてゐる敦を知つたものか。弘助は、いきなり、敦に飛び掛つて了つてゐる。弘助の頭髪は、凄じ程、逆立つて、眼尻は裂けさうに怒りを帯びてゐるのである。

「何故貴様は俺の顔に泥を塗つたんだ！ 貴様は馬鹿か。ム？ 何と俺に誓つたか貴様はもう忘れたのか！」

「待つて呉れ給へ！」

敦は夢中になつて、胸を取られてゐる、手を揉ぎ放さうと藻くが、腕には力がな

い、  
「何！ 待つて？ 今更何を待つて？」

弘助の怒は極度にして、腕には力瘤が拳のやうに膨れ出した。

「そ、それには、栗原君！ 譯があるから放して呉れ玉へ。」

「馬鹿！」

叫ぶ聲と、振りかざした右手の、石のやうな拳とは、一髪を容れる間もなく、敦は、雪の上に横なぐりに倒れたが、急に起き上る處を、弘助の手は又捕へて、放さぬ。

「俺は何と云つて久子さんに詫るのぢや！ ム？ 俺は貴様に、最早。久子さんを如何するのだとは云はない！ 然し、俺は何と云つて久子さんに詫るのぢや！」

又もや弘助は敦に恐ろしい力で打ち掛らうとするのを、危く避けた敦はもう唇はわな／＼慄えて生きた色もない。重い花瓣のやうな雪が、ちら／＼降つて來た。そして、暫くは。垂頭るゝ人、怒り猛る人を包んで了つて。茫と白く黒く現はしてゐた。

「さあ！ 返事をしろ！ 貴様はそれで済むと思つてゐるのか！ ム？ 人面獸心とは貴様のやうな、心の腐り果てた奴を云ふのぢや！ 貴様は周囲の迫害に兜を脱いで、屈して了つたのぢやらう！ 俺は左様信じて居るぞ！」

「許るして呉れ給へ！ 僕の意志が弱かつたばかりに、遂に、此様云ふ事になつて了つたのだつた！ 面目ない！ 許るして呉れ給へ！ 僕は……」

「黙れ！ 貴様の云ふ事はもう何も聞かんぞ！ 俺は、今日迄、貴様を見損つて居つたぢや！ その救つてやつた貴様に、倒々、欺されて了つた俺の心を少しは考へて見ろ！」

「許るして呉れ給へ、僕の覺悟が足らなかつたのだ。」

弘助の、髭面からは、雪の水のやうな涙の雫が閃めく。

「貴様は、愛のない結婚は罪惡である位の事は、知つてる筈ぢや！」

「許るして呉れ玉へ。」

敦の聲は、胸に詰つて出なかつた。

「貴様は、自ら知つて其罪惡を犯したのぢやないか！ 貴様は道德の罪人ぢや！」

弘助の聲涙を帯びて慄えて来る。

「僕は、もう今日死んで了つてゐる。死んでゐる、藤川敦といふ意氣地のない奴は既に此の世にないのだと思つて、許して呉れる事は出来ないか、栗原君！」

敦は此丈、聲を絞つて叫ぶと、後は何が何か、もう目が眩んだやうに茫となつて了つた。

「ム？ よく言つた！ 貴様今日死んだのぢや！ 俺は死んだ奴に用はないぞ！」

栗原はつと、掴んでゐた胸倉の手を放すと、敦は、其反動を喰つて、よろ／＼する。

「もう貴様に用はない。」

栗原は、轉げてゐる制帽を引つ掴むと、すたく／＼呷け出した。

「おい！ 栗原君！ 君に頼むことがある！ おい栗原一寸待つて呉れ玉へ！」  
 敦は、追ひ縊らうとしたが、弘助の姿は、築山の蔭に隠れて了つて、もう見えなくなつてゐた。

「あ——、俺は、眞實に死んで了つた！」

敦は、雪の上に、がつくり倒れて了つた。賑やかな坐敷の方からは、人々のさんざめく聲がする。白い雪は、鳥の胸毛のやうに風に吹かれて、散つて来る。

と、敦の耳元には又、聲がする、敦は蒼褪めた顔を揚げて、聲の在處を探すやうに起さ上つた。

「敦や！ 何處にゐるんです。」

お民の聲は、敦の耳に針を打ち込むやうにびんと響く。と、聲の下からお民は現はれる。

「おや！ 其處で、何をしてゐるんです！ 狐に魅まれたやうに！ 早くお出でよ！」

祝言ぢやありませんか。」

やがて、よろ／＼歩き出す危なさうな足元を眺めてゐたお民は、

「まあ、お前、羽織も袴も、雪だらけぢやありませんか！」

と驚いて、つと、敦の冷たい手を執ると、はた／＼と、雪を拂ひ乍ら、歩るき出した。

### 三 心と心

年は替つた。人の心も變つた。寒い暗い北國のやうな雪空は、春の伊吹に攻め寄せられ、一たまりもなう何處へか、逃げ失せて了つたやうな、透き澄るばかりの霞める青空が、短かい若芽を萌出した杉の間から覗かれる。暖かな三月の始めは、變りなく巡つて来るのであつた。梢から梢へに渡つて行く小鳥の翼さも薄さうに見えて、杉の垣から眺められる土蔵の白壁も、懐しい光を帯びて来た。

かうして巡り去り巡り来る春秋の輝は、何時も間違つた例はないけれども、浮世の歡樂に眼の醒めぬ人間は幾代重なつても、矢つ張り眠つて居るらしく、囚はれやすい果敢ない人の心は、少しの光り、少しの闇にも右往左往して、揚句の端は、悲しんだり泣いたり悔んだり恨んだりせねばならぬ、深い谷底に、獨りでに轉げこんでゐるのである。それは只々、嘘と偽りで築ぎ上げた立派な、義理といふ名のつく城に捕虜となつて、桃天の匹偶、秦葉の吉瑞を得たるもの寔に以て大賀の至りと、其時には死んだ氣で忌々しい虚事か何ぞの様に腹さへ立ちかけてゐた敦——二つ三つの月と一緒に變るのが當世と云ふ譯でもなかつたであらうが、要するに、何事も眠乎として停らぬ世に獨り敦ばかりは、そうは行かぬと力んで見ても仕方はない、と時は凡ての物を忘れしむる。過去の古疵は時の力に對しては何の勢もないものである。その敦一人を責むるのは酷い。

久子はもう一人の母になつた。流石に誠也は、可愛く、お咲の懐に入らぬ日は多





くても、誠也の腕に抱かれぬ久子の生んだ子を見ぬ日とてはないのであつた。

久子が孕むのを知らなかつたお咲は、父の顔を知らぬ乳兒に迄邪慳に當るのであつた。父なし兒、父なし兒、お咲は、乳呑兒に誠也がつけた名の、お美佐とは呼ばすに、

『父なし兒！』

と、呼んで、まだ、久子が産褥に蒼白い頬を枕に摺り付けてゐる頃から、彼女を泣かせてゐた。お美佐が生れてからやがて、三つばかりの月を送つて了つた或日、お美佐を脊負つて外から歸つた清一は、そのまゝ、お美佐の赤い着物を縫ひ乍ら、頬りにぼろ／＼涙を零してゐた久子の居間へ、つか／＼駆け込んで行くと、慌て、茶の間の方を指さす。

『如何したの、清ちゃん！ 茶の間へ誰か來たの。』  
と、無理に引つ張つて行かうとする清一の後ろに、ついて久子は黙つて茶の間の方

へ出て行く。と、やがて一二間で、仕切りの障子になる處で、久子は、ふと立ち止つた。そして耳を澄す。お美佐を脊負つた清一は、夢中になつて、障子と障子の隙間から、部家の中を覗き始める。

部屋の中には、長火鉢を真中に、お咲と誠也が、何事か言ひ合つてゐるらしい。時々お咲の突慥頼な鋭い聲がする。久子はやゝ暫く、じつと外で立ち聞きしてゐたが、涙は雨のやうに頬を傳つて流れ始めた。

清一は、頻りに障子の隙から覗いてゐたが、突然、脊中のお美佐が、何かに襲はれる夢でも見たのか、耳を刺るやうな、ひり／＼した鋭い聲で泣き始めた。

清一は、吃驚して揺り出す。久子は忍んで話を聞いてゐる場合なので、お美佐をあやすことも出来ず、途方に暮れたが、ぐい／＼清一の袖を引き乍ら、慌て、自分の居間へ引き返さうとする途端、意地悪く、障子は茶の間の内から開かれて、泣き顔をしてゐる二人の前に、のつと顔を出したのはお咲であつた。

「清一！ お前其處で何をしてゐたんだえ？ え？ 人の話を立ち聞きしてゐたんぢやないかえ？」

と、立ち聞きすれば耳の聞えぬ啞を捕へて、久子に當て付けて、叱り放つ、

清一は、泣き出しさうな顔をして久子を顧みる。久子は、恐ろしさに何も云へないでゐると。

「雙だつて、人の立聞は聞えると云ふから、清一、お前も聞えないことはないのたらう。」

お咲は久子を白眼に睨みつけた。そしてお美佐の泣き止まぬのを、おろ／＼して止めも切らずにゐるのを見ると。

「五月蠅いねえ、誰の兒だか解りも知らない兒に！ 眞個に久子！ お前何故、泣きつ放しにさせて置くのだえ。」

と、怒鳴るかと思へば、

「清一！一寸お出で！」

と、清一の手を掴むと、尻ごみするのを力任せに茶の間へ引き摺り込む。と、肥乎としてゐられず久子も、後ろから、小さくなつて跟いて行つた。久子がお咲に憚るのは、お美佐が生れてから、更に甚しくなつた。それを口實にお咲は、折があれば久子を捕へて、

「久子！お前は、妾を眞個のお母さんだと思つてゐないから、そう水臭い、隔てのあるやうな事をするんです。」

と、口癖のやうに當り散らすのであつた。

「清一！久子！二人とも此處へお座り！」

と、清一を見るお咲の眼は久子に移つて行く、

「お前そんな小さい子を抱えて、此から先、如何しやうと思ふんですか。それについて、今お父さんと相談をして居た處ですよ。ね。そうでせうお父さん！」

お咲は黙つて苦々しい顔をして、煙草を喫してゐる誠也を振り返る。

「ね、久子！そんな弱そうな赤ん坊を抱えてさ、これから如何せうと云ふ考だえ。妾はそれが心配なんですよ。早くお前を嫁けて了はないとね。義理のお母さんだから、お前の事は、少しも構はないで、勝手に子供を拵へるまで嫁にも遣らずに放つて置くと、他人様から云はれますからね。」

と二口目には、久子が氣儘に、親の眼を盗んで分を生んだ事を吐き散らすので、その度に、久子は、消え入りたい程、面目なく、悲しく、終には、こうまで言はなくてもよささうなものと、お咲を恨む事もあるのだつた。

「いゝ親の面汚ごしたよ、眞個に！お前それで、如何して他所へ嫁く積りだよ。え？」

久子は顔から火の出るやうに恥を覺える。

「え？久子！黙つてゐたつて解らないぢやないか。」

久子は嘔り上げるばかりで、垂首れて了つた。

「ね、久子！ 赤ん坊は如何する積りかえ？」

「妾、どうにでもして育て上げます。」

「何ですと？ 自分で育てる？ へん、よくそんな立派なことが言へるね。お前誰

の世話になつてゐると思ふんです！ 眞個に圖迂々々しいよ、折れて出て行く先の

こ、でも頼むかと思へば、こんな太い事を云ふから、腹が立つぢやないかえ？」

「おい、お咲。あまり非道い事は云はないがい。」

「いゝえ。」

と、お咲は、誠也の顔をぎろりと見る。

「此儘にして形をつけて了はなければ、妾は世間に對して、出す顔がありません。

貴殿は口を出さずにて下さいまし。お願いですから。」

「だつて、相談なら相談のやうに、もつと穏やかに話したらいゝぢやないか。」

「妾は、これが性質ですから。」

と、お咲はむつつりしてゐたが、やがて顔を揚げると、

「どうだらう、久子！ お前どうせ、赤ん坊を抱えて一生獨身で生活出来るもんぢ

やないから、ね、物は相談だが、赤ん坊は、妾に預かれないかね。」

と、云ふお咲の口裏には、深い心があるらしい、

「お母様の御志は妾、ほんたうに御有難うございますけど、それは、あんまり勝手

過ぎますから……」

「否だと、お言ひだね。」

「……………」

お咲は、久子が黙つてゐるのを、見ると、もどかしさうに、

「否だと、お言ひだね。」

「いゝえ、決して否だと申すのでございませませんが、お母さんにお頼み申す義理でも

御座いませんから。」

「ム？ 成る程、それは、そうでせう。それは大丈夫だよ。」

「お母様御育て下さるのでございますか？」

「何を云ふのだね、馬鹿々々しい！ 世間の手前、お前が、こつそり生んだ子が、妾に育てられるかね、里子にやるんですよ！」

「えッ？」

「ほ、何も吃驚することはありませんよ。世の中には、珍らしくない事だからね。」

久子は、もう、どうしていゝか解らなくなつた。頼みに思ふ父の誠也まで、どうやら、お咲の口に捲き込まれて了つてゐるらしいのに、頼みの綱も切れて了つて、泣くより他にとる道もなくなつたのである。お咲が、お美佐を里子にやれと責むる事は日に日に烈しくなつて來た。

一四 木 蔭

「媼や、ちよつと、これを御覽。」

房枝は、己が居間に風彩を崩して横になつたまゝ、皎々と頭の下から白い光を放つ電燈に照らされながら、お杉の膝頭から、すつと一面に取り散らされた、演藝畫報、人氣俳優の寫真やら繪葉書やらを、一心に眺めて、恍惚りしてゐたが、こう云つた。

「何でございますの？」

お杉は、疍高い房枝の聲に、居睡りしてゐたが、はつと醒める、そして前後を取り繕らふのであつた。

「媼や。ちよいと、この役者を御覽な。」

と、花形役者の肖像畫を、お杉に見せる。

「おや、これは、誰人様でいらつしやいますの？」  
と、呆然た答へに、房枝はもどかしくなつて、

「あら！ 媼や、お前何を云つてゐるの。これは奴の助ぢやないかえ。役者だよ。」

「おや！ そうでございましたか、ほゝゝ。」

「何て、綺麗な素顔だらう。お前！ 如何思ひかえ。」

と、お杉を見る。

「眞個に、すらりとした結構な姿でございますねえ。」

「あら嫌だよ。媼や、結構な姿なんて……、お前の言葉にはちつとも情味がない

わねえ。」

お杉は、房枝の云ふことが、一寸頭に入らぬらしい。

「媼や。眞個に惚れ惚れするわねえ。」

と、房枝の双つの瞳は、寫眞の中へ自然と吸ひ込まれるやうに見えてゐたが、房枝

の頬には紅がきざして、いつしか微笑さへ浮いて来る。お杉は又、うつら／＼睡りかけてゐたが、

「妾、一寸行つて来るわ！」

と、立ちかける房枝の聲に、ぎつくりして、慌て、眼を開けると、

「あれ！ 奥様！ 今時分、お一人で何處へゐらつしやるのでございます。」

と、狼狽へて、房枝を引留めやうとする。

「妾ね……媼や！ これは内證だよ。」

と、房枝は何事も、生家から連れて来た小間使ひに相談する癖がついてゐる。我儘

に氣隨に育つて来た房枝には、お杉は何處へ行つても、股腹の臣であつた。

房枝は、お杉の耳に口を當てるやうにして、

「役者の處へ逢ひに行くのよー ちよつとだけ、ね、いゝだらう！」

と、私語のに、お杉は、電氣に觸れたやうに驚いて了つた。

「奥様！ 貴女何を仰有るかと思ひましたら……滅相な。飛んでもない……」  
と、血相を變へて目を廻くして、昵乎と、こう云つた房枝の心を見透すやうに、見詰める。

「だつて、妾、逢ひ度くつて、逢ひたくつて、毎日、そればかり考へてゐるんぢやありませんか……」

と、子供のやうに拗ねる眞似。

「いゝえ、いゝえ。奥様、私がお側にお従き申して居りますからには、決してそんな風儀の悪いことはお留め申します！ 若し、これが、旦那様のお耳に這入るやうなことがございましたら、奥様如何なさいますか、これから、露そんな事を仰有るものではございませんよ。」

と、お杉に、意見がましく出られて、房枝は、ぶりつと怒つたらしい。出抜けに、荒々しく、べつたり寫眞の上に、座つたかと思ふと、瞳を据えて、お杉を恨めしく

見詰めてゐたが、又、ふいと立つて、

「あゝ、嫌だ、嫌だ、妾は、何故こんな窮窟な家へ嫁いで了つたんだらう！」

と、不貞腐されて、ふりく怒つてゐる内に、自棄氣味で、

「ちえッ！」

と、舌打ちした儘、其邊をぶら／＼してゐたが、次の部屋へ這入つて行くと、暫くして、あはたらしい様子で、

「媼や！ 媼や！」

と、云ひ乍ら、小さい手文庫を抱えて来る、

「おや、それは旦那様が、大切にしておらつしやる手文庫ぢやございませんか、旦那様が鍵をお掛け遊ばすを、お忘れになつたのでございませう。奥様、黙つて御覽になることは、お止しなさいまし。如何な大切な書類が藏つてあるか不御解せん。」  
と、吃驚して云ふと、房枝は憤然となつて、

「媼や！ 妾がすることは何でも止めるのね！ いゝよ！ 夫の物を妻が見たつて差し支へはないぢやないかえ。」

と、一つ一つ手文庫の中を調べかけてゐたが、やがて、一枚の小さい女の寫眞が出て來た。房枝は、胸を躍らせ乍ら、暫くそれを飽かず眺めてゐる。

房枝の手はふる／＼憤怒と嫉妬に慄え出した。そして物言はず、寫眞を引き破らうとして。

「まあ！ 奥様！」

と、房枝はお杉に手を捕られて、寫眞は措いて今度は、お杉に掴みかゝらうとする途端に襖が外から開いた、

「如可した、房枝？」

敦は、其處へ這入つて來るや否や、落花浪籍の光景に、暫くたち止つてゐると、房枝は、目的を替へたらしく、

「あなた！ この寫眞は、久子のごさいますね。え？ 如何してこんな穢らはしいものを大切になさるでございます！ さ、さ、お返事をなさい！ 口惜しい！ 口惜しい！」

立往生の體であつた敦は、又、何時の我儘が始まつたと思つたが久子の寫眞を如何して持ち出したんだらうと、房枝の後ろを見ると、自分の手文庫が、底から掻き廻されてゐる。お杉ははらくする。

「房枝！ お前は誰に斷つて、文庫を持ち出したんだ！」

と、睨みつけやうとする、

「口惜しい！ 口惜しい！ 妾こんな家にはもう居ません！ 歸ります！ 歸ります、……あゝ口惜しい！」

狂ひ廻る房枝の足に蹴られた、茶道具は、ぐわらくと音を立て、破れて了つた。



## 一五守 袋

「おい——。大將——、獨占博士、は、は、は。」

湯島天神の宵の鼻へ、本郷の通りから、二人の書生が、千鳥足を、危く踏みしめて、よろ／＼と崩れかゝるやうに、宮の境内へ這入つて來ると。薄暗い、木下闇に煤けた、鐵砲洋燈を前に控へて、薄汚ない五十格好の髭男が、夢でも見るやうに、茫やりしてゐる、と、件の書生は、其處まで、よろ／＼と、やつて來ると、危なく、怪しい、算木の臺に、打つ突からうとする。髭男は、ひやりとして、

「あッ！」

と、眼を廻くしたが、其處は商賣だけに如才なく、

「はつは。學生さん！ 一つ人相を見て上げやう！」

と、手招ぎするのを、書生は、酒の息を、面白さうに吐き乍ら、げら／＼笑つてゐ

る。

「如何です、一つ、え？ 學生さん、人相から手相で、少か、五錢ですよ。参考の爲に一つ見て置いても、損はなりませんぞ。」

と、糞真面目になる。と、もう素早く、一人の書生の袖を掴へてゐる。

「手を出しなさい。ウム、成る程。貴郎は、將來有望ちやが。」

と、委細らしく、天眼鏡を手の上にかざして、首を傾けて、フム、フムと獨り點頭く。

「ちやが、ちつと、具合が悪いね。」

と、書生の顔を見る。煤けた獨占屋の眉の邊りには、大きな黒子が、びく／＼動くのを、書生は、可笑し相に眺めてゐたが、

「おい！ 大將、早く見て呉れ。金は、やらんぞ！」

と、手を引つ込めるのを、獨占屋は慌て、確乎と握る。



た。敦に一目見せたいと云ふ心は、彌が上にも増つた。如何して、此可愛いお美佐が、棄兒するのも同然の里子や何かにやられやう。死んでもお美佐は、大事にせねばならぬ。

それには、如何したら、いゝだらうか。一日長く家にゐれば、一倍、お美佐の運命が悲しい方に傾いて行くやうに思はれてならないのであつた。實際、お咲の心を推し測つて見れば、お美佐を不憫と思ふ念は少しもなかつたのである。愚圖々々してゐれば、お美佐は、何處へやられるか解らない。

久子が眠つてゐる隙を狙つて、お美佐を誘拐さぬとも限らぬ。若し、そうでもなつたら。敦に逢ふ時が巡り来た時に、何と云つて詫られるであらう。とても、生きてはゐられない。久子は、眠る間はあつても、お美佐と自分の身の振り方に心を悩めぬ日とはなかつた。今は、早、敦といふ自分の戀しい、人は、男爵の令嬢と結婚して、暖かい家庭を作つてゐる。その昔の人に、何といふ氣の狂ひか、蔭に操を

守つてゐる久子は、假令、身は土に石になるとも、二度と、知らぬ男に心は移さぬものと、覺悟してゐる。鬱々として物思ふ日は、續いた。お咲が、お美佐の紅い頬を、つねつて、泣き出すのを、心よく思ふことは珍らしくなくなつて來ると、もう久子は、凝乎として、生れた家に、落ち着いてゐられなくつて、そゝくさと身繕ひをすると、折から、お咲や、清一や、誠也の見えなかつたのを幸に、何處を目的ともなく、ふら／＼迷ひ出て了つた。然し、心の中には、或る堅い覺悟の動くが見えたのである。

「坊やー 坊やー お母さんの家はもう世の中に、ないですよ。」

久子は、お美佐を連れて、家を出る時、こう云つて、心から、誠也や、哀れな不具の清一——今まで、よくお美佐を可愛がつて、自分の妹のやうにして呉れた、清一、幾歳の昔、此處に、自分の手を執り乍ら、長い長い眠りに陥つた、久子の生みの母に、涙乍ら別れを告げた。

久子は駒込の杉垣の家を出ると、灯ともし頭を、何の氣もなく、ふら／＼する足を引摺り乍ら、せめては、心の紛れるものと根津から池の端に出ると「江戸家」の前を素通りして、賑やかな、上野の廣小路へ出ると、暫くは、目まぐるしい夕暮時の忙しい光景をぼんやり眺めてゐたが、不意に、抱き込んでゐるお美佐に泣き出されて、

「おゝ、おゝ、泣くのぢやありませんよ。坊やは、いゝ子だからね。泣くんぢやありませんよ。美いちやんが泣くと、お母様は、悲しいのですから」と、何か、歌ひ覺えた、淋しい唄を、子守唄に代へて、唄ひ乍ら、お美佐を、揺り揺り、來るとはなしに、湯島天神の長い石段を登り切つて了ふと。

「あゝ。」と、吐息するやうにして、天神の境内に、狐に魅まれたやうに、しよんぼり立つてゐたが、先刻から、酔ひ潰れた二人の書生が、獨占屋の汚ない爺に、からかつて行

つて了ふのを、睨乎と、身動きもせずに見守つてゐたが急に、悲しさが、咽喉元まで込み上げて來て、眸はそろ／＼霞んで來るのであつた。が、ふと、心に思ひ出ることでもあるらしく、何か獨り點頭きつゝ、先刻の獨占男の方へ寄つて行つた。

髭男は、じろ／＼久子の様子を眺めてゐたが、

「如何です、奥さん！ 一つ貴女の人相を見ませう。」

「何卒！」

久子は、心よく應ずるのであつた、元より、此頼みになりそうにも思はれぬ髭男にも、久子の今の場合には、運命を左右する、神の如くにも見えたのであらうか、自ら足は進むのであつた。

「手をお出しなさい。一つ、……成る程、貴女は、……えゝ、苦勞の多い方ぢや。」

と、久子の白い手を握つて、咄く。

「あれ。妾ではござりませんので……」  
と、久子は蒼白い頬に紅を漂はせる。

「あッ！ お子さんですか、これは飛んだ失禮。どれどれ、ム、お嬢さんぢやな。手つ手をお見せ。手つ手をお見せ。お爺さんが、運勢を見て進せませぞ。」

と、ふわりとして、桃色の真綿を圓めたやうな、お美佐の小さい手を執つて、眼鏡越しに、一人で額に皺を寄せてゐる。

「ム、解りました！」

と、獨占男は眼鏡を屋臺机の上に置いて、頻りに算木を動かしてゐたが、

「いゝ、運勢ぢや。」

「あの——運はいゝのでございますか。」

折から通りかゝる、二三の男女が、不審さうに、久子の後ろにイすみ乍ら、髪爺の話の聞いたり、久子の顔を見詰り込んでゐる、久子にはそれが、此上もな

い苦痛であつた。そして、逃ぐる事もならず、足は宙に浮き浮きしてゐる。

「然しな、當分は、手相で見ると、あまり、感心出来ませんな。」

「え？ あの、小さい内は、運が悪いのでございますか？」

「そうです、然し、大きくなるに随つて、雲の間から月が出るやうな鹽梅に、運勢は見事に登りますぢや。」

男は髭をすこいて、久子の顔を見詰める。久子は、此縁もない、汚ない。盗人が乞食のやうな男に、譯なく、じり／＼見詰められるのが、もう堪らなくなつて。

「大きくなつたら、よくなるのでございますね。」

「そうです！」

と、獨占屋が、引受けたやうな、斷乎とした返事を聞くと、小さな藁口から、銀貨を一枚摘み出して、そつと、机の上に置くと、駈け出すやうにして、天神の境内を飛び出ると、もう、覺悟は腹に出来てゐるらしく、本郷三丁目から、轟然として、

鈴なりの電車が駆け過ぎるのを待つて、急いで、電路を跨ぐと、石垣に添ふて、大學の裏手へ出た。

久子は、歩いた。何も考へずに歩いた。そして、間もなく、彌生が岡へさしかると、濡れて濁くとも見えぬ瞳に、高く、「藤岡」と云ふ圓い軒燈が、高壯な石の門の上から、道路へ首を伸べてゐるのに、吸ひ込まれるやうに覺えて、思はず、すと身内に冷寒が通ずるのを覺えたのであつた。

此邊一帶は、餘り燈の光がなくて、雨模様いのかげの月は、藤川家の垣越しに、蒼と茂り合つた老松の葉にこされて、茫々と、鳴る電柱を、斜めに照らしてゐる。

嘎然と鳴る足駄の響が、久子の後ろを襲つた、久子は愕然として、立ちすくんで了つたが、其牙えた響が、横通りへ外れて了ふと、久子は、ほつと吐息して、足音を忍ばせると、藤川家の厳しい忍び返しの板塀に、びつたりと身を寄せて、黒猫が這ひ行くやうに、する／＼と門前まで、歩るき寄つて、一寸逡巡つたが、蒼白い頬

の色が、松葉の間から落ちて来る月明りに、物凄程、ちらと光ると思ふ間に、久子は、門の内へ、隠れて了つた。

そして、再び出て来る時は、肌身を離さず抱いてゐたお美佐の姿がない。久子はお美佐を、見ぬ父の家の、冷たい石の上に、あり丈の着物に包めて棄てたのであつた。久子が、四邊を見廻して、つと、立ち去らうとする途端、石の上に寝かされて母に逃げられるとも知らぬお美佐は、消魂ましく泣き出すのに、久子は、後ろ髪を引き戻されるやうに感じて、ぼろ／＼涙を落し乍ら急いで、門の内へ駆け戻つた。悪夢に襲はれたのであらう。お美佐は直ぐ泣き止んだ。

「おゝ、おゝ美しいちゃん、お母さんは、お前の爲を思つて、此處に棄て、歸るのですよ。此家は、お前のお父様の家ですよ。お父様はお前を大切にお育になりませうから、暫く心棒して、此處に寝て居て頂戴。」

久子は、今、此處で、こうして別れて了へば、もう、恐らくは、お美佐とは相小

逢ふ期がなからうと思ふと、双つの萎みで、心持凹んだ、眼からは、潜然として雨の如く永別の涙が溢れ落ちるのを禁じ得なかつた。

「お母さんは、もう歸へりますよ。お母さんは、お前と別れて了へば明日から如何なるか解りません、お前は何と云ふ可愛想な娘でせう！ やつと、今にお父様に逢へるかと思へば、今まで、お前には、只つた一人の味方でしたお母さんに別れて了はねばなりません。」

久子の、涙聲は、低く漂つてゐる。お美佐は、から／＼笑ひ出した。

「まあ！ 美しいちゃん、お前、何が嬉しいの？ お母さんは、お前と別れ度くないので泣いてゐるのですよ。」

久子は、突然、家の内に私語く人聲を聞くと。

「美しいちゃん。さようなら。」

と、云ひ捨て、慌て、植込の笹簾の中へ、身をひそめて昵乎と、お美佐の身を

守るやうに、といろく動悸を押へてゐる。

「おや！ 貴郎！ 貴郎！ 家に棄子がありませんよ！」

私語いてゐた人は、つか／＼とお美佐の側へ寄つて、

氣味悪相に顔を覗き込んでゐる、それは房枝であつた。

「何！ 棄兒！ 何處だ、それは？」

と、後ろから、狼狽える様にして敦が出て来る、久子は、笹簾の中から、幾月振りに見る敦の姿の、驚くばかりに變つてゐるのに、袖で顔を掩ふた。

## 一六 人 間

「坊や。坊や。坊やはいゝ子だ。」

と、敦は獨りお美佐の無邪氣な顔を眺めながら膝の上に抱いたなりで、物の小一時間も、笑臺に入つて居る。

「坊やのお母さんは、今頃、嘸お前を見たがつてゐるだらう、可愛相に、之もお父さんの罪だから、勘忍してお呉れ。」

人には聞えぬ程の低い聲で、口の中に繰り返す敦の心の中は、漸く迄頃亂れかけて来た、自分の子であり乍ら、それを公然に、我子と言ふことも出来ず、他人からは、拾ひ子として冷たい眼で見られ、家族の者は、自分の他に、抱いて呉れる人すらない、お美佐を棄て来た久子の心は嘸かし辛かつたであらう。それにしても久子の腹に出来た子が、自分によく似て居るとは言ひ條、何時の間にかう大きくなつたのであらう。守袋の中に納めてあつた、自分と久子の小さい寫眞と、お美佐の生れ月日を書いた久子の筆の跡、門の内棄て、あつた此の娘の胸に隠してある。守袋を危機一髪の處で、房枝へ發見されやうとした、其時、誰の子か解らぬ汚ない乳呑兒を、棄て、了へと、叫んだ。あの房枝、それ以來、浮かぬ顔をして、二口目にはお美佐の惡態つく憎らしさ、考へ詰めて來ると、お美佐が可愛相でならない。

このまゝ日の蔭に、成長して死ぬ迄も、自分の子であると名乗ることは出来ぬであらう。あゝ、思へば思ふ程敦の心は穩ならずなつたのである。

久子は、何と思つて此子を棄てたのであらう。厄介と思つたのであらうか。邪魔になつたからであらうか。久子が自分を想ふ心が消え失せ果てた證據ではなからうか。さりとて、久子と別れて今日まで、自分は一日として久子の姿を頭に描かぬ日とてはないものを、一夜として、久子の夢を見ぬ夜はないものを、と考へ詰め、かと思へば否々。久子は家人の迫害に逢つて、此子を間宮の家に置けば危険だと思つて態々里子にもやらず、此邸へ棄てに來たのであらう。お美佐の爲を思ふ親心からした仕事であらう。さるにても、最愛の兒を棄て、兒に別るゝ時の久子が悲しみは考へれば考ゆる程、あゝ、久子は可憐な娘であつた。嘸、雨の夕、風の朝、自分の無情を恨んで恨んで、泣きに泣いてゐるだらう嘗ては久子が只一目、お美佐に父の顔を見せたいと思ひ煩らつたやうに、丁度、敦も亦、一日此子を連れて久子に逢ひ



度くてならなくなつた。薄幸の女、悲しい淋しい女は、今何處で何をしてゐるだらう。その昔戀ふた心を鄭つて了つて、身軽るになつたのを幸に、他人へ嫁するのではなからうか！

敦はこう考ゆると、掌の中から玉を取り落したやうな心になつて、厚い座蒲團の上、凝乎として座つてゐられなくなつた。

敦は、お美佐を抱へたまふ、洋風の書齋へ、つか／＼這入つて行くと、久子に送る悲しい手紙を書き初めた。お美佐は、膝の上に、すや／＼眠つてゐる。

「おや、貴郎、此處にゐらつしやつたの。」

足音を忍ばせるやうにして、書齋の入口から、突然顔を出した房枝の大丸髷の赤い手柄が、驚いて振り返る敦の目には、鬼百合の如く見えた。房枝はつか／＼這入つて來ると。

「貴郎何を書いてゐらつしやるのです？ 一寸拜見」

敦が、忽ち引隠した手紙の書きかけを覗き込むやうにする、其時、敦の濡れた瞳が、ちらと房枝の眼を惹いた。

「おや！ 貴郎、泣いてゐらつやるんですね」

と、猶も、顔を反向けて黙つてゐる敦の横顔と、隠し場所がなくて、手の中へ圓め込んでゐる手紙の端とを、見比べる房枝の顔は、次第に暗く険になつて來る。

「貴郎、何が悲しいでせう。泣き乍ら手紙を書く、………何だか可笑しいわね」

「お前の知つた事つちやないから、早く彼方へ行つとれよ」

敦は、憤然となる、溜つてゐた涙の大粒が、ぼとりとお美佐の顔に落ちた。

「おや、左様でございますか、行けと仰有れば參らぬことありませんがね、一體その手紙は、誰にお出しになるんです。」

「誰に出さうと僕はそんな事迄お前に干渉して貰はんでもいゝ！」

「久子へお出しになるんです！ えゝ。妾、貴郎が仰有らなくても、ちやんと解つ

て居ります。」

「馬鹿な！ お前は何を言ふんだ、疑い深い奴ぢやな、そんな世話しなくつたつてお前の身をちと謹しめ！」

房枝は泣き聲になる。

「妾、貴郎から、其様なことを、言はれる覚えはありません。」

「何？ 無い？ お前が俳優に、送つた艶書は、あれは何だ！ 俺は、お杉から奪ひ取つて、ちやんと持つて居るぞ！」

「えッ！」

と、房枝は吃驚する。が、

「否え。それは、嘘です！ 貴郎は御自分の悪い處をお隠しなさうとして犯さぬ罪を、妾になすらうとなさるんです！ あゝ口惜しい！」

房枝は袖で顔を被ふた。

「よし、悪い事を悪いと思はんで、却つて、そんな強情を張るなら。」  
と、錠をかけてある机の上の手文庫を開けると、赫然となつて何か掴み出すと、房枝の前へ、投げつけて、

「さあ、房枝！ お前、これでも嘘と言張るか？」

と、房枝を睨みつける。房枝は、子供のやうに、慌て、それを拾ふた。一つは、敦が横領したと云ふ手紙、その蔭には、小さい守袋が何時の間にか落ちてゐた。慌て、怒りに任せて掴み出した、皺だらけの長い、重い艶書と一緒に、迂濶して敦は投げ出して知らずにゐたのである。

房枝の眼は、手紙よりも守袋に光つた。後ろを向ひて、中をほじくるやうにして見て居る常に怪しみの眼で、其隠し場を心掛けてゐた、守袋——中から掴み出されたのは、お美佐の身元を、房枝にすつかり語つてゐる。

「口惜しい！ 貴郎その子は誰の子です？ あゝ口惜しい！」

「何、何、何だと？ 手紙は如何した？」

「手紙處ちやありません。お義母さん！ お義母さん！」

何事も呆氣に取られてゐる敦の前に、慌て、現はれたお民を捕へると、房枝は身を揺つて泣き始める。

「お義母さん！ 妾もう、こんな家には居ません！ 妾は華族です！ あゝ、欺された！ 口惜しい！ 妾は、歸ります！」

と、狂ひ廻るのに、お民も譯は解らず、只狼狽へる。

「房枝様、ど、どうなすつたんです？」

と、云ふ口の下から、房枝は、守袋の中に這入つてゐた物を、お民に投げるやうにして渡した。

「あッ！ それは、此方へ出せ！ 何でもないのだ！」

敦が跳りかゝつて奪はうとすると、お美佐は物に怖ぢて急に泣き出した、敦は、

ハッと思つて後退りする。

「お義母さん！ 妾歸ります！ 妾歸ります！」

と、恐ろしい勢で飛び出さうとする房枝を止めたお民は、もう何も彼も解つたらしく、

「滅相な！ 妾は、何様な事があつても、あの兒は棄てさせるか、人にやるかします、敦が何と云つたつて、此妾が計しませんから、房枝様は、辛棒して貰はなければお父様に申し譯がありません！」

房枝を慰むるやうにして、べつたり座つて了つた敦の顔を睨みつけて、お美佐を奪はうと、努めた。

## 一七 友 情

ジリジリと燃ゆる瓦斯の光りに、「藤川家裏門」としるした繰り戸の内から、乳呑

兒を抱へて、忍び出た敦の顔には、動かぬ決心の色が仄見えてゐた。

「美佐子！ 美佐子！ お前のお父さんは、あの鬼のやうな人の側からお前を連れて出るんですよ。ね。お父さんは粥を啜り水を呑んでも、偽りの富は捨てねば、お前が可愛想です。ね、お父さんは、もう、世の中に、地位も財産も何も彼も入らない。只、お前一人が、可愛い。お父さんの生れた家は、此家です。美佐子見て御覽。もう再び此の家には歸りませんぞ。」

敦は、塀の外へ、ふいと姿を隠して了つた。が、やがて谷中へ抜けると、もう、栗原の家の前にゐるのをた。

「まだ起きてゐるかな。」

敦は吐き乍ら、抱えた子を一寸揺つて、締め切つた戸の隙から、内の様子を覗いてゐる。

「栗原君！」

コツコツと戸を叩く、

「栗原君！」

「誰だ。」

それは確かに弘助の聲である。敦は、ハツと思ふと、烈しく動悸が打ち出した。

「僕です！ 藤川です！」

答へる敦の聲は恐ろしく震るへてゐる。

「何？ 藤川？ ム。」

と、唸る様な様子であつたが。急に戸を開く氣色もない。

「成る程。其様な奴も、昔は俺の友人にあつたが。今は死んで居らんぞ！」

「そう言はずに一寸此處を開けて呉れ給へ。僕は決心して来たんだから。」

「いや！ 藤川は死んで居らん！ 貴然は幽霊ぢやろう。」

「頼むから戸を開けて呉れ玉へ。」

「欺されんぞ！ 吾輩は欺されんぞ！ 幽霊には欺されんぞ！ 毆られぬ内に早く歸つて了へ！ 畜生！」

戸の外から窺つてゐる敦の眼には、机の前を離れかけた弘助か、再び、思ひ直して、机の前に座り込んで、頭を抱えてゐるのが、映つて来る。

「そう云はずと、後生だから、僕に逢つて呉れ玉へ！ 僕は決心をして来たんだ！ 覺悟をして来たんだから、君、一寸此處を開けて呉れ玉へ！」

「何？ 覺悟したとは？」

「僕は、家を出て了つた。」

「ム？。」

弘助は再び、立ち上つた。そして、ウー——と唸るやうにして腕組をしてゐたが、やがて椽側へ出て來ると、勢よく戸に手を掛けた。

「お、敦か？」

「君に、逢はず顔はないのだが、………僕の心を察して何も言はずに、既往の罪は許して呉れ給へ。此の通り僕は謝まる。」

敦は片手にお美佐を抱き乍ら、片手を縁の板へついて、面目なさうに頭を垂れた。

「ム？」

弘助も呻吟する。が、つと立つと、一枚ぎりの座布團を引つ奪るやうにして、裏を反すと、

「おい、藤川、これに座れよ！」

敦は黙つて、にじり寄る。弘助は、泰山の動く如く、仰り加減になつて、胡座する。

「藤川！ よく、其處へ氣が附いたぞ！ それでこそ、弘助の忠告は、生きて居つたわ。」

「何とも面目がない。君！僕は乞食になつても久子との間に生れた此子を育てる積りだ。君！當分此處へ厄介になれまいかね。」

「ム。承知した。久子さんも、それを知つたら嘸喜ぶぢやらう。おい、一寸、貴様が抱いてゐるその赤兒を一寸俺に抱かせて見ろ。」

敦から手渡されたお美佐は、愛くるしい眼をばつちり、開けたが、見馴れぬ、骨太い顔の男を、昵乎と見詰めてゐたが、急に泣き出す。

「おゝ、赤ん坊、泣くな！泣くな！ム？父ちゃんの只一人の親友の伯父さんぢや、あゝ？泣くなよ。」

と、揺ぶる。

「君が怖いんだから、どれ、取らう。」

敦は、一寸笑ひ乍ら、お美佐を受取つた。お美佐は泣止んだ。

「おい。一寸、待つて居れ。」

と、弘助は立ち上るのを、敦は、慌て、

「ど、何處へ行くんだ、君！」

「ム、久子さんの處へ、君の復活を報せやうと思ふんぢやが、如何だね。」

「だつて、君！もう、今夜は遅いせ。」

と、帯の間の時間を見る。

「九時だよ、君！明日に頼むから、今夜は止して呉れ玉へ！」

と、云ふのを半分も聞かず、袷一枚で、外へ飛び出して了つた。

「おい、栗原君！待つて呉れ給へ。」

敦は、椽側迄跡を追つたが、氣の早い男は、もう其邊に見えなかつた。敦は、今更、友に厚い、唐竹を割つたやうな心の栗原が、情を、心から感謝せずにはゐられなかつた、お美佐を抱えてゐた敦の眼からは嬉し涙が零れる。

机の上に重なつてゐる書籍、壁に掛けてある、制帽や制服や、短い袴などに、年

年前の自分が生活を、ゆくりなく思ひ出して、獨り、昔に替る自分の有様が、悲しくも淋しかった。そして、戻らぬ過去の夢を獨りで、環の如く、頭腦の底に繰り返して、さしぐまれた。

\* \* \* \* \*

間宮の家は、暗かった。子を捨てた後の久子は、みじめにも悲しい憂き日を幾日か送つた。今宵も、不機嫌なお咲は、誠也が留守を幸に、久子を茶の間へ呼び附けて、苦味走しつた小皺の顔に、何時も變らぬ、峻しい色を浮べて、久子に、お美佐の在り家をなじるのであつた。それを幾重にも詫びて、黙々と秘してゐる久子の姿はもう、他目にも痛々しい程であつた。お咲とは血を分けた清一さへ、此有様を、見れば、泣かすにはゐられなかつた。お咲を憎まずにはゐられなかつた。母と子。異腹の姉と弟——。其間に満ち渡る愛情を、啞の少年の計器に掛けて見るならば、

姉の方へ下がるだらう。

清一と久子とは、それほど、いちらしい仲であつた。そして、不思議にも、お咲に親しまないのである。久子が子を棄て、歸つてから、頻りに利けぬ口をもぐもぐ動かして、お美佐を、探し廻る様子であつたが、不審の眉を寄せて、考へるともなくお美佐の行衛を考へた。それから、忘れたものか、根か盡きたものか。それとも、腑に落ちた解釋が出来たものか、餘り久子に向つてお美佐を背負ふ手眞似をして乳呑兒を出して呉れとは言はなくなつてゐたが。お咲と久子との間が、恐ろしく峻くなつたのに、小さい胸を一人痛めてゐる。

「久子！ お前、赤ん坊を何所へ置いて来たんです！」

こう云ふ荒々しいお咲の聲を、隣りの部屋の柱に、凭り掛り乍ら聞く様子をしてほろ／＼泣いてゐたが、

「久子！ お前何故、赤ん坊の居處を、秘密にして置くんです。妾に言ふのが、ど

うして悪いのです。お前、如何しても言はないのだね。いゝよ、言はなければ、言はないでも、いゝがね。」

と、一息するらしく、一口も利かず泣伏してゐる久子の、纏れ合ふ髪の上に、凄く眼を落す。

「それは、言はないと決心してゐるのだからね、殴られても殺されては言はないだらうから、妾はもう聞くことはこれぎり止すことにするよ。だから久子！ お前のやうな女の癖に大膽な、親泣かせの子はないよ！ 押し詰つてゐる縁談は、如何する氣だえ？ 又、先の口同様に、愚圖くくの奥の手を出して、断る考へだらうが、そうはなりませんよ。久子、お前、行き度くない者なら、仕様がな。無理に引摺つて行く嫁入もあるまいから、断るか如何する氣かね。」

怒るかと思へば、急に和かになる。お咲の口は、久子を釣り込まねば止まぬらしい。「妾、お嫁入りは致しません。」

「ふゝん。おや、矢つ張り、片思ひの操を立て通す見だね。相手の男は、立派な華族の娘、貫つて仲よく暮してゐるぢやないか。真個にじれつたいよ。馬鹿々々しい。妾なら面當にも、此様な結構な縁があるんだから、身を固めて、向ふを張つて見せるね。親でさへ、腹が立つのに、よくまあ、黙つて平氣で見て居られるねえ。」

忌々しそうな口調でお咲は、身を揺る。

「妾、決して、操を立てるのではありませんが、嫁に行くことだけは……」

「嫌なんだね。ふむ。」

「妾、世の中が、熱々嫌になりました。お言葉に背く罪は恐ろしいのですが、何卒、これ計りは、御許るし下さいませ。」

久子は、断然り言ひ切ると、お咲は、今まで、堪えてゐた憤怒が、一時に突發したやうに。

「何だと、人が優しく出てやれば、好い氣になつて、生意氣な！ 世の中が嫌にな



つたと？」

「……………」

「よくも、其様な勝手な熱が吐けたもんだな」

びしやりと痛々しい音がしたと思へば、お咲の手は、久子の頸首を、むづと掴んでゐた。

「お母さん堪忍して下さい！」

恐ろしいお咲の手から遁れやうと藻掻くと、お咲は、

「五月蠅い。」

とつい續様に、右の平手は久子の横顔を掠めた。

「痛い！」

お咲が、久子を引き摺るやうにして、憤恨を洩してゐると。其處へのつそり這入つて来た清一は、いきなり、お咲の手へ獅噛み附いた。

「あッ！ 痛い！ 何をするんだえ？ 清一？ 放しよ、お放し。」

と、清一を突き除ける。と、突如に、がらりと、障子を明け放して、這入つて来た男がある。それは、敦と別れて来た弘助であつた。

「おや、お前さん、誰だえ。妙な人ぢやないか、他所へ狂人のやうに黙つて這入つて来て。」

と、お咲は、久子の髪を掴んだまゝ、愕然としてこう云つた。

「はゝゝ。無斷で這入つて来たのは、僕の悪い所ぢやが。話は、今窓の外から聞いて知つたんぢや。お前さんかね、久子さんの母親は？」

「餘計なお世話だよ。人の話なんぞ立ち聞きして。お前さん眞個に狂人だね。出て行つてお呉れよ、物騒な！」

お咲の手はまだ久子から離れぬ。

「狂人は恐縮ぢや、はつは。」

「何の用だえ。薄氣味の悪い。汚ない男だよ！」

「猛烈にやつて来るなは、ちや、實は、俺は、その久子さんに一寸用があつて来た。」

「女だときくびつて……交番は近いよ。眞個に圖迂々々しい。」

「交番に用はないんぢや。」

弘助は、お咲の手を久子の髪から、引き離れた。

「久子さん！ 敦君は、心を改めて、既に僕の家で貴女を待つてゐるです。」

「えつ！」

久子は涙に腫れぼつたい瞳を揚げて驚然りする。

「さ、君、そこで、返事は？」

「有難うございます！」

「何です、此人は？」

お咲は、餘りの意外さに、こう云つて久子を再び引き捕へやうとする。弘助はそれを妨げやうとする、間に立つてゐた清一は。

「お母さん。許るして下さい。妾、死んでお詫をします、お父様も清ちゃんも何卒勘忍して下さい。」

と、隙を見て逃げだす久子のあとから、ばたく、駆け出した。

「おい、久子さん！ 死ぬには及ばんぢやないか。」

と、慌て、引捕へると、

「貴郎、何卒、お放して下さい。妾は、生きてゐられないのでございます。」

と、無理に弘助の手を拂はうとする久子の手を確乎と掴んで。

「僕に任せて下さい。悪くは取り計はんから。」

と、低い聲になる。久子は如何することもならず、泣き出した。清一は、呆然とした。

「お前さん、人の娘を盗まうと云ふんだね。」  
 「盗むんぢや。盗むんぢや。盗んだらどうする？」  
 「よし。」

お咲は、立ち上り様、久子へ飛びかゝらうとして、妨げられると、ふらくとして、其處へあつた鐵瓶を、發矢！と弘助に投げ附けた。が、其時は、もうお咲を置いてきばりに三人の姿は、其處へ見えなかつた。

「畜生！ 久子！ 久子！」

と、お咲の叫ぶ荒々しい聲、疊を蹴立て、何處かへ駆け出す音が、静かな夜の空気を劈いてゐた。

\* \* \* \* \*

更け兼ねる春の夜は未だ宵の中のやうであるけれども淋しい佗び住居の栗原の家

では、時計が十一時を打つて、お美佐を膝の上に寝せつけた敦は、まんじりともせず、栗原の歸りを待つて居たが、十一時を過ぎても、庭の垣に踏む足の主も見えぬので氣の緩みか疲れの故か少しとろくと睡らうとした時、三つの足音が、表にするかと思ふとハツとして眼を見張つた處へ、出し抜けに、  
 「おゝ、藤川、安心せい。首尾は上乘であつたぞ。少し亂暴とは思つたが、久子さんを連れて来た！」

「ゑゝ！ 久子を？」

驚いてゐる敦の膝へ、

「敦さん！ お懐しうございます。久でございますよ！」

と、暗い處から駆け飛んで来た久子は絶りついた。その後から、清一が、のつそりと顔を出す。

「おゝ、清一君まで。」

「あはつは、姉弟の仲もこれ程にありたいもんだな。今に此の家に久子さんが居ると思へば、一人で飾るぢやらう！」

「清ちゃん！送つて頂いて有難う！」

久子は、今宵から昨日とは變つて別世界に來た心地である。

\* \* \* \* \*

敦と久子は栗原の盡方で、夫婦同様になつた。清一は幾日絶つても駒込の家へは歸りそうもない。弘助は、奇と云へば奇とも云へやう。二人に勸めて、櫻を目的に面白い花見茶屋を五日間の花盛りに始めさせることにした。向島に五日間の妙な生活、二人は笑つた。清一は未だ歸らない。

## 一八 浮沙路

向島の櫻の土手は、紺碧に晴れ渡つた朗らかな、四月末の日曜日の午前の中から淺草で電車を下りた花見衆を、其儘一杯乗せた群舟が、隅田川の水を分けて落花のやうに這つて來る、言問ひの渡船場あたりは、茫と霞んで了つて、土手の向ふ川岸の今戸、橋場、白髯の邊りが、もや／＼した暖かい光の中に眼は目を、しばたくやうに見えて、千住方面から、その深い春霞を吸つて來る、花見船には、酔ひ狂つた都の人々が、紅白だんだらの幔幕の裏に、赤く熟した顔を、赤く白く、映し彩つてゐた。秋田男爵の別荘の邊りは、もう花がはらはら散り掛けて、地上には白雪紅雪が、斑らに織られてゐた、その日曜の一日は、花に明けて花に暮れた、翌る日は、もう寂然と静り却つて、落花の上を、駄馬の脚が、ぼかぼか踏んで行く。曙の色は未だ青白い色に熟れ切れずして、川面の水も冷たく、花瓣を浮かべた、春の水はゆたりゆたりと、言問ひの岸をひたして、都鳥の夢は、まだ醒めずにゐる。向島の土手は昨日疲れに、朝寢でもしてゐるらしく、團子茶屋の女連が、竹箒を握る手に、

散りかけた櫻は遠慮なくはらく散つてゐる。

花の散る朝程静かなものはない。

敦が急に思ひ立つて、栗原の學費を半分裂いて貰つて久子と始めた、花見茶屋も

四五日の内に、人足が絶えるのを待つと、引き拂はねばならなくなつた。

一時は、眼まぐるしい程に久子も忙しかつた、のが、一度、落花流水の時季に巡

り逢ふと、もう幕が縮れた様に、寂くなる。

久子は、敦と、夫婦の誓ひをして、二人の間に可愛い、美佐子まで擧げ乍らも、

浮世の籬に隔てられて、幾月の浮き日を過ごして、辛く、四月の中頃に、こうして

相愛し相想ふ二人は、暖かくも、静かない家をこしらへたのが、この花見の茶屋で

あつた。

『敦さん！ 貴郎、もうお起きなさいませよ。ほ、よくお休みだこと。』

久子は、さして廣くもない敦の寢室へ、初々しい丸桶の姿を見せて、枕邊に、お



美佐を抱くやうにして、曉の夢まどかな、敦の顔を覗くのであつた。

『ほゝ。貴郎未だ御目醒めでございませぬの？ おや、美佐ちゃん、よくお休みだこと。』

と、一寸、お美佐の頬を、指の先でつゞき乍ら、微笑して立ち出でゐると、恐ろしく取り散らされた、ベンチの邊を、掃き終ると。茶の室から持ち出した、赤い毛布を二三枚、其ベンチの上に敷きつめると、

『まあ！ 何と云ふ美しい景色だらう。』

と、川岸を睨乎と眺めてゐる内に、ふと、こう呟いて、そゞくさと、朝餉の手廻りをし始める。

『姉さん！ 早いね』

『おや！ 何人。』

と、久子は、ふと聲の方を振り向くと。

「まあ！ お光さんございましたの？」

と、隣り茶屋の娘を見て、優しく頬笑む。と、其處へ、何時の間にか、眼を醒ました、お美佐を、襦袢で背負つて、何やら、呟き呟き、清一が出て来た。

「清ちゃん。有難う。濟まないわねえ。今日は、學校ですから、美佐は、おんぶして貰はなくともいゝんですよ。」

と、つかく清一の例に寄り添ふた久子は、

「美佐ちゃん！ お、お、お、お眼が開きましたの？」

と、接吻して、につこり笑つてゐる、お美佐の可愛らしい顔を飽かず見守つてゐると、

「御免なさいよ。」

と、後に女の聲して、ふと、久子が、振り向くと、四十格好の女と、華やかな若い丸髷の女とが、落花の雨を浴び乍ら、今しがた毛布を掛けた腰掛の上に、靜かに腰

を下ろしてゐる。

「いらつしやいませ。」

久子は二人の客の後ろ姿を一寸見ると、未だ茶も沸かぬのに、早い客だと思つて馴れぬ業に只もぢくしてゐる。

「房枝様のお父様の御別荘には、妾、始めて宿めて頂きましたが、ほんとうにお立派でございますわね。」

「あら。そんなでもございませぬわ、お義母様。」

と、云ふのを見れば、二人は今しがた、秋田家の別荘の小門を潜つて散歩に出た人々であつた。久子は、暫く、二人の話に、耳を傾けてゐたが、氣掛りになるらしくおすく二人の女の横顔を覗き込むやうにして、そつと盗見してゐたが、顔の色は見る見る變つて行く、久子は、その儘、家の中へ駆け込むと、慌いしく、

「敦さん。貴郎！ 大變でございますよ！」

と、顔を洗ひ了つて、煙草を喫し乍ら茫然してゐた敦の前へ、眼の色を替へて、坐り込んだ。

「何です、久さん。馬鹿に狼狽してゐるぢやないか。」

「あのね、貴郎。お母様が……」

「えッ！ お母さんとは、僕の母か？」

「はい。」

「ど、どこに、久さん。お母さんはゐるんだ。」

「は、弾ね上るやうに躍り上つた。そして、久子の前に立つて、つか／＼と表へ飛び出す拍子に、ベンチの女は荒々しい足音に、ふいと、後ろを振り返ると。

「おや！ お前！ 敦ぢやないかえ！」

と、驚いて立ち上ると、側の丸髷の女も、立つと、出抜に、

「まあ！ 貴郎ぢやありませんか？ まあ、妾、呆れて了つたわ！」

と、お民と顔を見合せて目を圓くしてゐるのは房枝であつた。

「お前、如何して此様な處に居るんです。さあ、敦や、妾と一緒に歸り、ね、お前には立派な妻の房枝様も此處へお出だから、ね、さ、歸りませう！ 妾、如何位

お前を探してゐるんだか、知りしない。」

と、敦の後ろに、石像の如く動かすに、わなく、慄えてゐる久子を、じろりと白い眼を送ると、久子は、おろおろ泣き始めた。

「お前、この女に欺されて、斯様な處へ、何をしてお出でさえ？ お前には立派な家と親が許して貰つた立派な妻があるのに、何で、こんな女と一緒に、馬鹿な真似をしてゐるのですえ？ お前、世間や、秋田の御前や、房枝様や妾などを、すつかり欺してゐたんだね！ そうぢやないとは、言へますまい！ さあ、悪い處は許るしてあげる。過ぎ去つた事は、もう仕方がないとして、此儘お歸りなさい。眞個に何と云ふ態です！」



お民は、房枝の心を煽り立てるやうに、口を尖らせる。

「眞個に、お前は、妾の家に家庭教師をしてゐた久子といふ女だね。何と云ふ圖迂々々しい女だらう。人の夫を横取りして！」

と、久子を睨みつけてゐた房枝は、華族の育ちに似氣もなく、

「えッ！ 口惜しい。」

と、久子に掴みかゝらうとするのを、辛く敦に妨げられるを、幸に、敦の手をぐつと握つて、引き寄せやうとする、敦は、只黙然として垂頂てゐる。

「ね、貴郎！ 妾の事は構はず。何卒、お願ひでございますから、お母様と一緒に、お歸へり遊ばせ。」

と、健氣にも、此處で、自分一人が、悲しい犠牲になつて了へば敦の身は、永遠に幸福となるであらう。夫婦になつたと思へば、涙の干ぬ間に、又別れねばならなくなつた。あゝ、これが、自分の約束された運命であつたのだらうと、こう云つたが

不覺の涙は、後から後から、無性に湧き出て來るのであつた。

「貴郎、何卒、お歸り下さいまし。妾の事は、御心配下さらずとも、何卒此儘お歸り下さいまし。」

と、ほろ／＼涙を拭く茶屋娘らしい模様の袖は、朝の風に揺れる、敦は、黙つてゐる、垂頂れた儘、顔も上げ得ずに、苦しい立ち場に立往生して了つた。今更いちらしい、久子の言葉に従つて歸るのも男として、忍びぬことは、充分に知つてゐる。けれども、房枝は、如何でもよし。お民の心を考へて見ると、決心は、蟻の穴から崩れかける水の堤の如く揺ごうとするのであつた、

「さ、敦、久子も、あゝ言つて居るのだから、何も、愚圖々々してゐるには及ばぬぢやないか。行きませう、房枝様、敦を連れてゐらつしやい。」

お民は、房枝の後を押さぬ迄も、房枝は、いきなり、敦の手を執つて、二三歩引き摺るやうした、久子は、美佐子を背負つて其處へ出て來た。清一の肩にもたれ

て聲を揚げて、ワツと泣き始めた。眼の前に、今朝まで、楽しい家庭を作つて愛の世界に、涸れぬ情の泉を汲合つてゐた、愛する人は、自分を、罵り盡した。女に奪はれやうとしてゐる。久子は何で悲しまずにゐられやう。

何といふ酷い世の中であらう、生木の二枝を一つ一つに裂くよりも苦痛であらうあゝ、短かい夢を見てゐたと諦めかねる久子は、地に伏して天を仰いで、此、恨みを世界の誰に向つて訴へるであらうか、花は頻りに散る。

川面の都鳥は、夫婦の仲も睡ましさうに波に浮いてゐる。

「さ、行きませう。」

よろ／＼と轉げさうになる敦は、久子を振り返つて見た。

「さゝ、あんな女に係つてゐちや、頭が上りません！」

敦は、前から房枝の手に引かれ、後ろからはお民に尻を押されるやうにして、歩るくとも歩るさ出さうとする途端、茶屋の様子を見に來た栗原は、忽焉として三人

の間に割り込んで、物も言はず、敦の手を執つて引戻した。

「おや！ お前さん！ 何をするです！ 敦は、妾の子だから連れて歸らうとする

のに、何で邪魔立てするんです。」

お民は慌てた。房枝は、驚いた。久子ははつと思ふ。

「お前さん、誰だえ！」お民は弘助を突き除けて敦を奪はうとするのを、弘助は、

「馬鹿！ 吾輩は、藤川の親友ぢや！ 早く歸んなさい」

「ふん。お前さん、餘計な差出口利くと、承知しませんよ！ 女だと思つて……」

「黙れ！ 早く歸つちまへ。早く。歸らんと殴るぞ！」

弘助は、眼を脱いて、瘤だらけの洋杖を振り上げると、お民と房枝は、慌てゝ、ばた／＼逃げ出して又、押し返さうとするのを、弘助は二度計り駆け出して追つ放ふと、笑ひ乍ら歸つて來た、

「はゝゝ。弘助が従いてゐる以上は、如何なる強敵が來やうとも、はゝゝ、敦君、

「久子さん安心してゐなさい。」

弘助は、笑ひ乍ら呆氣に取られてゐる、二人を見て、ぐっさうに笑つた。

### 一九 都 鳥

「おや！ 畜生、何とか云つたな？」

秀雄は、「江戸家」の戸口を荒々しく飛び出しかけて、君江を顧みて、睨みつけるやうして云ふ。

「お前さんのやうな男には愛相が盡きたと云ふんですよ！ 今に、何とか、するだらうと思つて、借金に借金を重ねて苦んで今日迄逃れて来たんだけどね。お前さんの氣を見れば、もう持ち直して立派に家でも持つことは、一生出来んと思つて居すとも、口癖のよ。お前さんも男なら、こんな稼業の女に何時迄も養つて貰つて居すとも、口癖のやうに腕がある腕があると言ふんだから、一つ此處で其、腕を叩いて見せちやどう

だね、意氣地がないよ、何とか云ふと、直ぐ短銃を振り廻してね、それで世間が渡つて行けるなら、行つて御覽よ。家へお歸りと何遍云つても歸らぬと思つたら、勘當をされて了つてるんだから、呆れて了ふ。ね、お前さん、今時の藝妓に、道樂の揚句で勘當された男を、可愛相だと思つて飼つて置く女は居ませんよ。」

君江の聲はびんと響く、眉の根は釣り上つてゐる。

「馬鹿！ 覺えて居れ！」

びしやりと締め切つて、口惜し相に唇を噛んで、両手に瘤を作つた秀雄は、それから根津の方へ、ひた急ぎに急いでゐたが、やがて、暗の中へ消えて了つた。

向ふ島の墓堤は夜は早花の影もなく更けて行つた。

一時間ばかり前までは、氣まぐれ者の唄が、言問ひ茶屋の彼方此方に聞えてゐた。

が、それも、ばつたりと止むと、

秋田別邸の煉瓦塀の横合から三つの黒い影が現はれると、別邸からは半町も距たらぬ、敦久子の茶見世の方へ、のそり／＼何事か私語き合ひ乍ら近寄つて行く。

「おい、其處だ。愚圖々々してゐないで、戸板を一枚引つ剝して、音を立てぬやうに密然と忍び込むんだせ、いゝか。」

こう云つた男か、忍び足に、敦夫婦がお美佐を中に、すや／＼寝てゐる居間の戸を指す。

「だが、若様！ 目を覺しやがつたら如何しますかいか？」

「その時きや、仕方がない、殺つちまへ、構はんから。」

「ム。」

二人の男は合點して、裏口へ廻つた。若様と云はれた男は、表口の塀に身を、屋守のやうに、びつたり、くつつけて、耳を澄すと、家の中の動静を窺つてゐる。

「おい。早く這入れよ。旨くやりや、お前達も都合がいゝんだからな。やり損なつたら、知らないぞ。」

若様は、五六間先に、黒く動いてゐる二人の覆面男に、兩手で、喇叭を作つて口に當てた。

静かな水の流れを、掻き亂すやうな、川鳥の羽ばたきが、ばだ／＼と聞えると、三人は、思はず、冷水を浴びせられたやうに、愕然した。

「貴郎！ 貴郎！ 誰か家の中へ這入つて来た様子でございますよ！」

久子は、目を醒まして、敦の耳へ、口をつけると、低い聲でこう云つた、が、敦は、疲れたが心からよく眠つてゐる。

「貴郎！ 貴郎！ 大變でございます！」

黒い二つの大きな影が、二三間先に、のつこり現はれると、久子は、恐ろしさに堪へ兼ねて、倒々、敦の枕に手を掛けて、揺ぶると一緒に、叫んで了つた。二人の男は、先刻、「若様」と云ふ青年と別れて、久子を盗み出しに來たのであつた。久子の大聲に、もう、これまでと思つたものか、矢庭に飛び出して、久子を、手取り足取り、次の間へ引き摺るやうにして、それが、

「ウムー」  
と一聲、腹の中から絞り出すと、久子の體は造作もなく肩車に乗つて了つた。久子は、肩の上で藻掻く、

「何をするのです！ 貴郎、貴郎！ 早く起きて下さい！」

只ならぬ久子の絹を裂くやうな叫び聲に、叩き起された、敦は、蒲團を一蹴りにかばと彈ね起きた。今のは夢であつたかしら、と、きよろしく睡入鼻の眼をくわつと見開いて、四邊を見廻してゐる。

「久さん！ 久さん！」

と二度呼んでも返事がない。部屋の電燈は消えてゐた。

「おや？」

果せる哉、今夢の中で聞いた久子の叫び聲は、實際であつた。敦は、手探りに電燈を灯すと、部屋の中は急に明るくなつて疊の上には、大きな男の泥足の型が、久子の枕元までつゞいて、久子の影はない。

「やッ？」

こう叫んだ敦の頭の中には、閃電の如く、盗み去られて藻掻く久子の影がきらめくと、其儘、二人の足跡を辿つて、外へ飛び出した。敦の眼には、何も見えなかつたが、只、久子の遠くで、叫ぶ聲を目的に、一散に駆け出さうとすると、

「待て！」

思ひもかけぬ聲が、後にあるかと思へば、物陰から、飛鳥の如く跳びだした黒影

は、驚いて立ち止る敦の腰を、力任せに蹴つた。

「何をやる！」

不意を喰つて、倒れた敦は、直ぐさま弾ね起きた。そして、今、暴行を企て、逃げ出す、黒影の跡を、必死になつて跟けた。と、その後から、烈しい物音に眼が醒めたものか、一間の内に夜具を被つてゐた清一迄、二人の連れ行く黒い動く影を指して暮然に駆け出した。

「待て！」

敦は行手に、目をさへぎる、一人の男の襟首へ手を掛けると、後ろへ引き倒して駆け抜いた、眼の前に、二人で久子を擔いで逃げる曲者の影を見ると、足は宙に動いたが、瞬く間に追ひ付くと、聲も掛けず二人に跳りかゝた。

「貴郎！」

と、不意に後ろから割り込まれて、擔いでゐた男が、よろよろ後へ退るはずみに、

久子は肩から投げ出されるやうにして、敦の腕に縋りついた。そして身構するらしい闇に動く男の姿を、早くも、横合から敦は殴り倒して、今一人を捕へやうとするが、身を翻へした男は、秋田別邸の扉の側へ逃げ込んで了うと、思ふ間に、敦は、再び力強く後ろから突き飛ばされて了つた。其處へ脱兎の如く、轉げ込んだ男がある。三つ四つの黒い影は、闇の底に、無言の儘、烈しい格闘を始めてゐたが、

「殴つたな。」

「悪漢！」

と、叫ぶ聲がして、鞆然と打ち倒れる音がする。と、闇の隙に、空を拂つて唸りを生じた、大きな長い物が、がくりと物に打ち當る様子である、

「ム……………」

聲の下から、轟然と白煙を吹き出した短銃の音がすると思へば、

「あつ！」

と、魂消る應が有つて、ぱつたり地上に仆れ伏す音、一寸四邊は静かになつた、土手の上に、ごろ／＼してゐる何者とも知れぬ影は、ほの／＼と明けて行く、東雲の薄明りに、茫々と青く白く、浮き出されて来た。

「何であるか知らんが、如何にも騒々しいと思つて来たが。こりや、怪しからん事が出来たもんぢや。」

獨り呟く、やうに、此處へ近寄る老人それは、秋田中將であつた、只ならぬ物の音、叫び聲に、不審を起きて、別荘の縁戸から、そつと出て来たものらしく、重なるやうにして、垂首れてゐる男、打つ伏してゐる亂れ髪の水、苦しんでゐる少年、と見て行く内に、

「やッ！ 秀雄ぢやないか！」

と、慌て、一人の男の側へつか／＼寄つて、頭に手を掛けて顔を見ると、  
「秀雄ぢや！ ム……………」

流石の秀遠も、爲す術もなく、立ちすくんだ儘。秀雄の額から小鼻にかけて、眞黒な血が糊のやうに湧いてゐた、一人の男は、ふと、身動を始める。そして、眼前に立つてゐる白髯の老人を一目見るより早く、

「や！ 閣下ではありませんか。」  
と、起き上らうとして、何處か痛むと見えて、べつたり、尻餅つく。

「ム？ 貴様は、敦さんぢやの？」

敦は、夢を見るやうな心地で、譯も解らぬ、光景に、膽を奪はれてゐたが、すぐ一二間先へ、苦しうな唸り聲を發して藻掻いてゐる少年の姿が目映ると、

「お、清一さん！ 如何した。如何した。」

と、もづ／＼這ひ寄つて、清一の體を抱き起すと、胸を短銃に打ち貫かれてゐる、其處から、生血が、どくりどくりと憤出してゐる。

「清一！ 清一！ 確乎りするんだ！」

清一は、細い白眼を見せた。そして敦の顔を見ると、いきなり抱きついた。

間もなく啞の少年の息の根は絶えた。

仆れてゐた久子が、やがて、目を閉つて仰向になつて死んでゐる義弟を見ると、狂氣のやうに冷たい死骸にとりついて、聲を限りに、

「清ちゃん！ 清ちゃん！ 濟まなかつた。お前のお蔭で、妾は助かつたが、お前は、可愛相に、一人で死んで了つた。」

と、泣き嘆いだ。土手の下を流るゝ、川潮の色も憂く見えて、秀遠の老眼にも、涙が籠つてゐた。

「敦さん！」

敦の手を執る老將軍の面は神の如く尊かつた。

「俺は、貴郎に……愛のない結婚を勧めて濟まんぢやつたの、秀雄に與へた短銃は人を殺すためではなかつたが、あゝ、自らを殺さなかつた、秀雄は、此少年の手に

斃れるのぢや、天の制裁ぢや。」

と、言葉を切つて云ふ、悲痛の色は満面に漲り渡つた。

「敦さん！ 俺は、房枝を引き取りますぢや。」

「……………」

敦は黙つて垂頭てた儘であつた。

「そして、更めて願ふ事がありますぢや。」

「えッ？」

「敦さん！ 俺は、此久子さんを貰はふ。俺の娘に貰はふ。」

敦に老將軍の心を推し兼ねて、只驚いてゐる。

「そして、新しく、敦さん！ 久子と云ふ娘を貴郎に上げやう！ これが、今の俺が義務ぢや、又、俺の希望ぢや！」

敦は、はら／＼涙を落した。老人は、久子の手を執つた。やがて、老將軍の膝下



には、手を握り合つた敦と久子が、物凄しい四邊の光景を後に、涙の美しい結婚の式を挙げた、川島は、頻りに羽ばたきする。水の泡は、結んでは解け結んでは解けて遂に一つの大きな泡になると、ぱつと消えた。

浮く潮の響は、朝の樂を奏し始めた。

陸の死骸には朝露が玉をつらねてゐる。

説小  
うき  
潮終

大正六年七月二日印刷  
大正六年七月八日發行

【定價金五十錢】  
(郵税金六錢)

不許  
複製  
説小  
潮きう

著者 磯千鳥  
東京市淺草區茅町一丁目十二番地

發行者 菅谷與吉  
東京市神田區松住町五番地

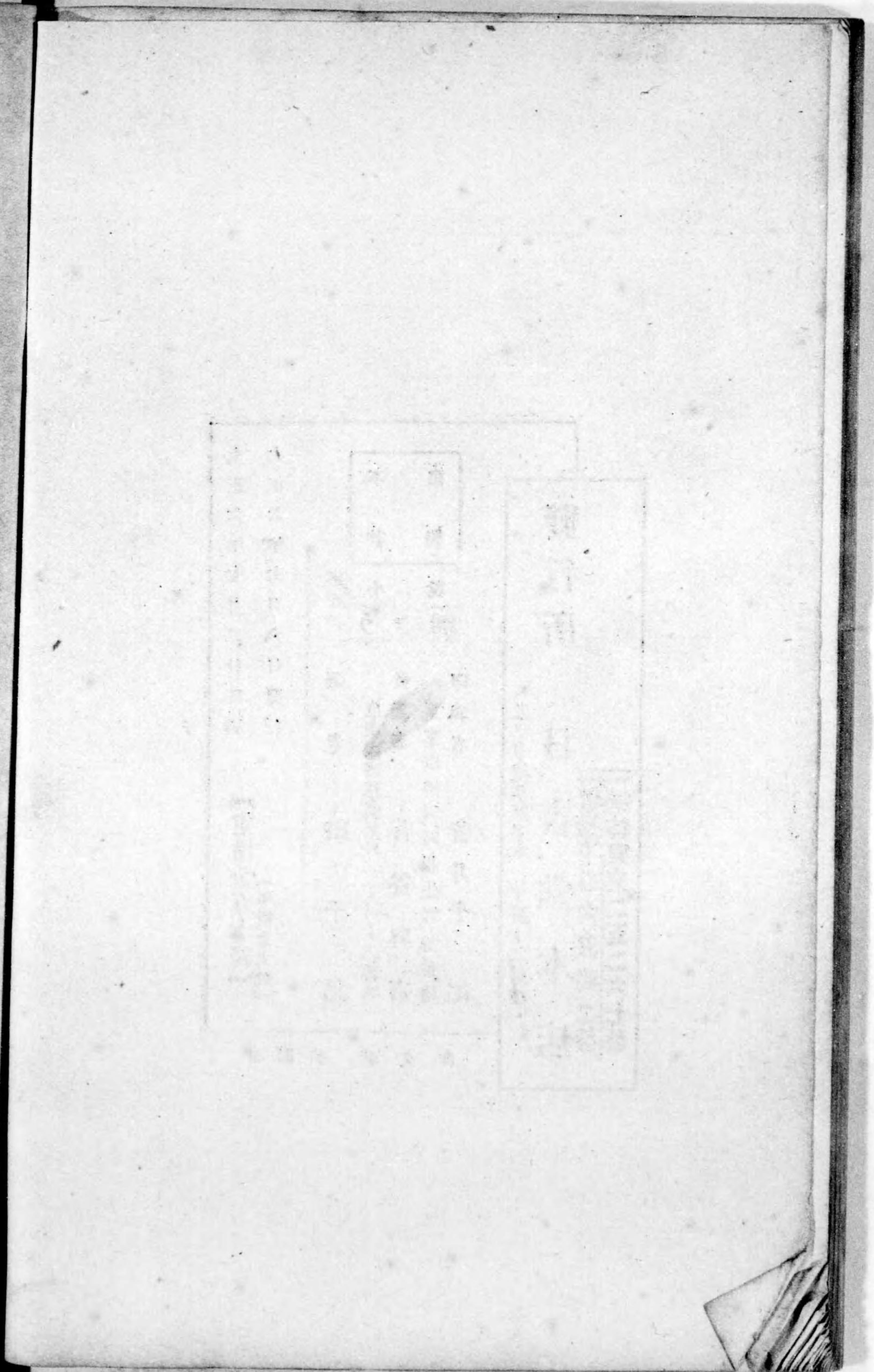
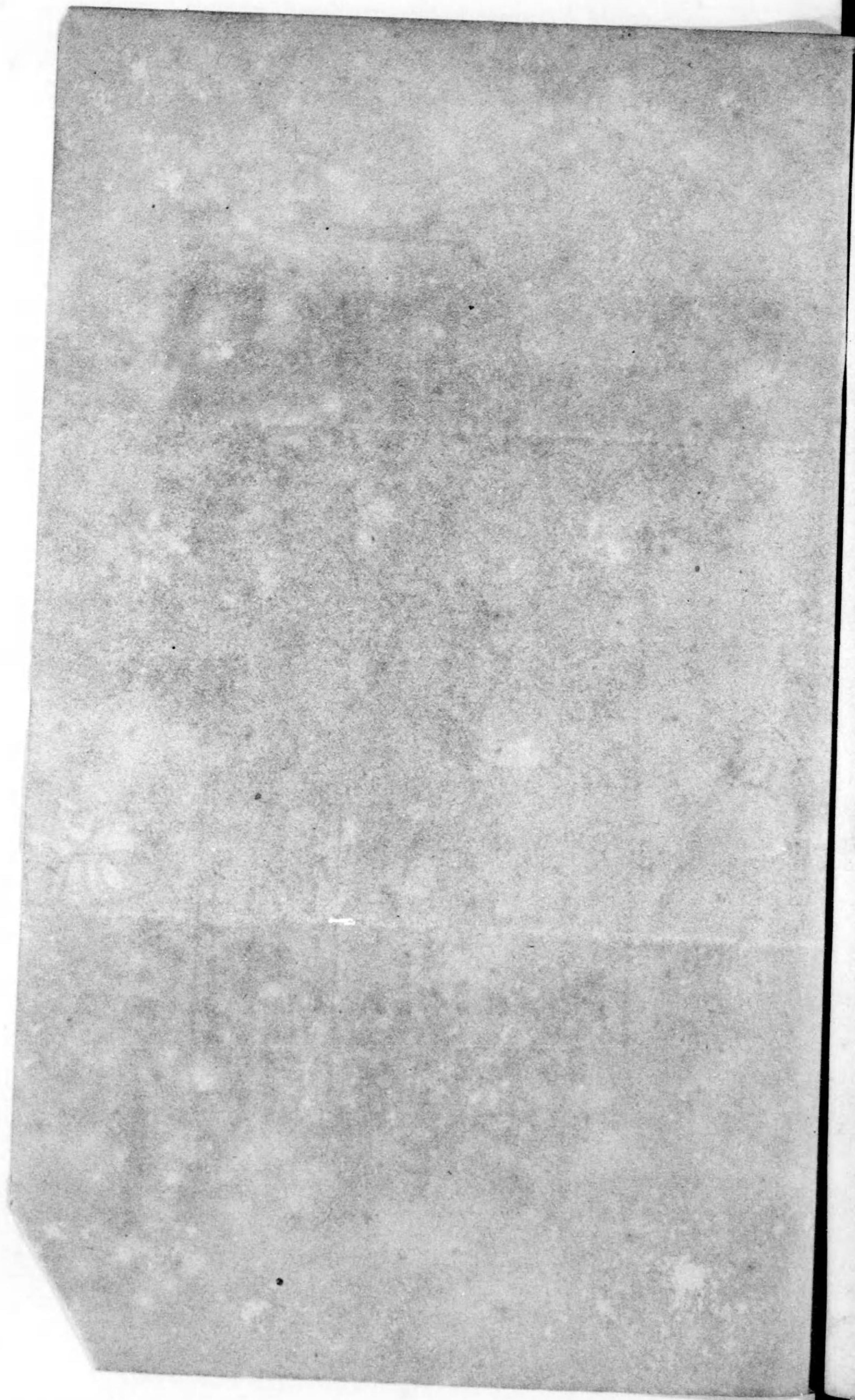
印刷者 菅井十一郎

會文硯所刷印

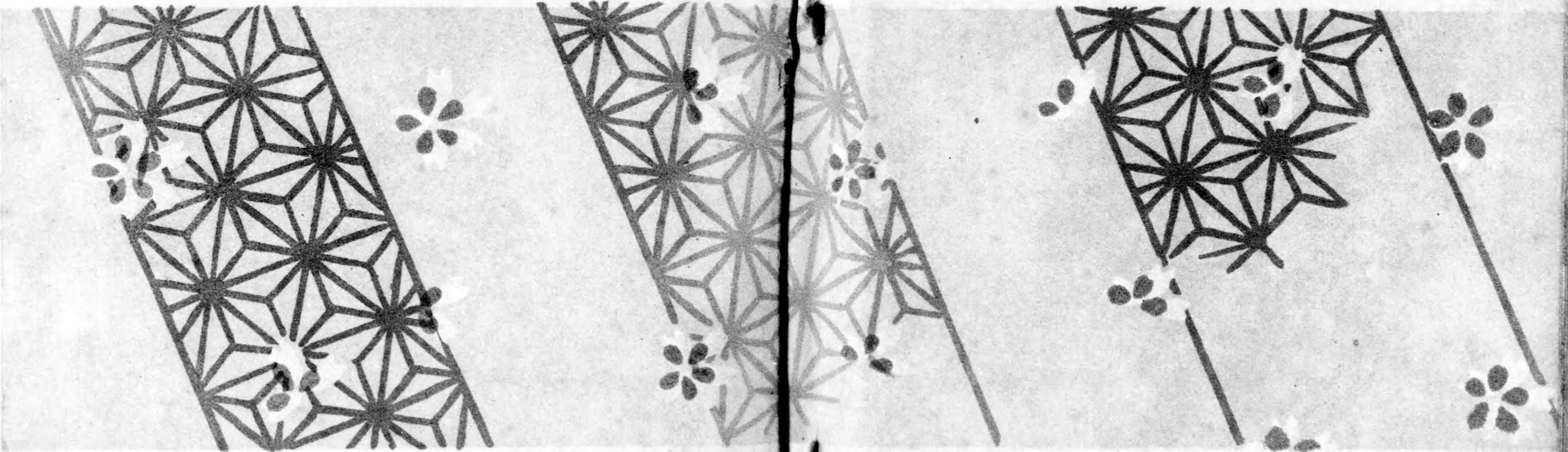
發行所

日吉堂本店

東京市淺草區茅町一丁目十二番地  
電話下谷六五四二番  
振替東京二五二六七番



179  
104



終

